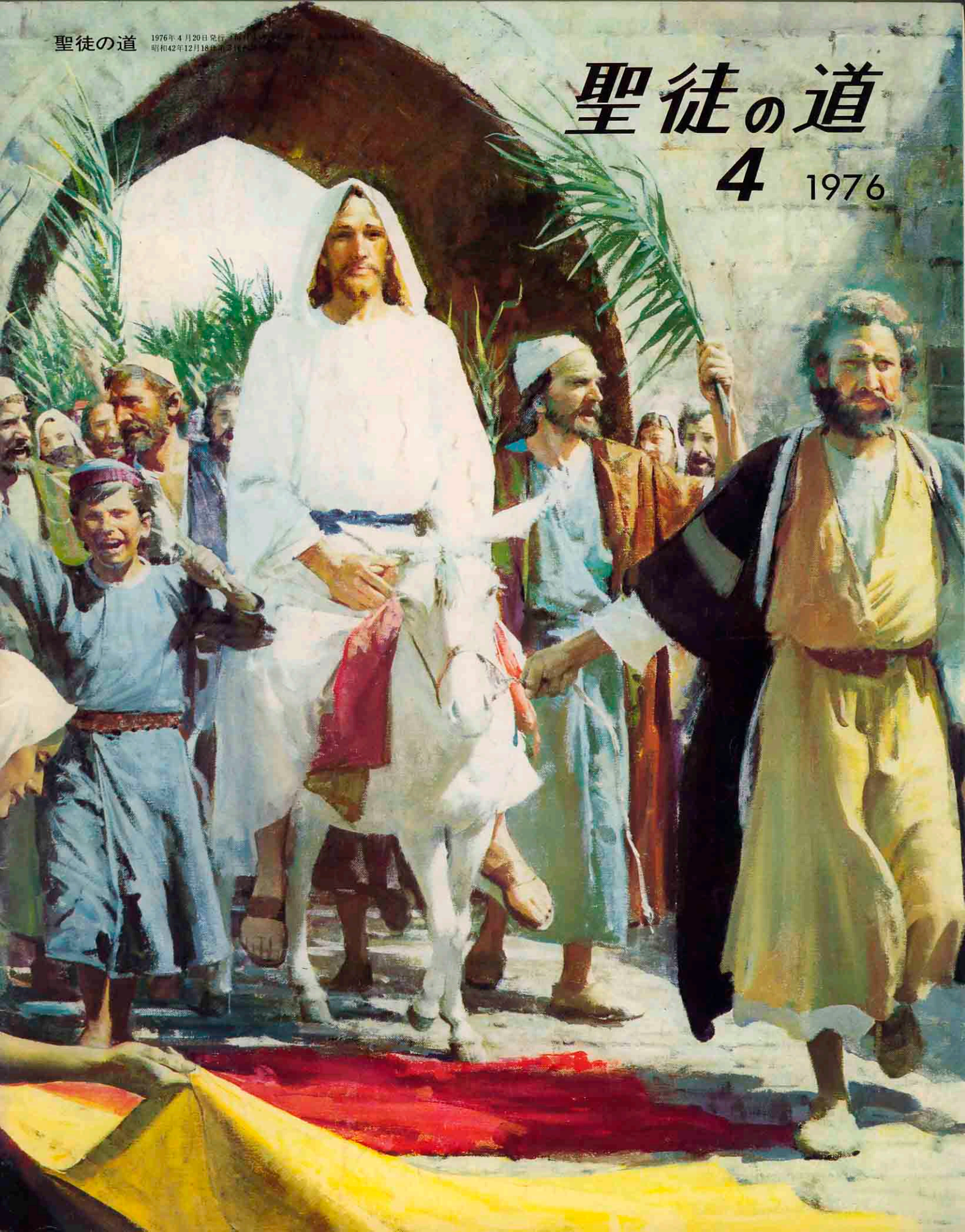
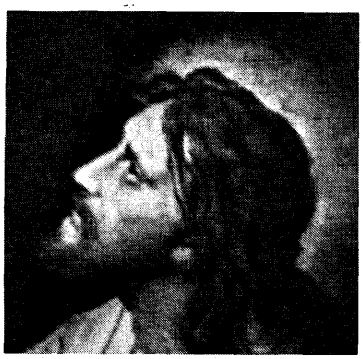
聖徒の道 1976年4月20日発行
昭和42年12月18日第3種郵

聖徒の道

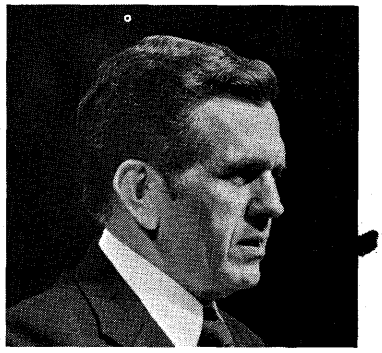
4 1976





P. 194

P. 198



P. 205

P. 202

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
デビッド・B・ヘイト
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

八木沼　修　一（日本語コーディネーター）

1976年　**4月号**

もくじ

人類への主の計画……スペンサー・W・キンボール……185
主は実に生きたもう われらは主を見たり……アイバン・J・バレット……188
木曜日の夜……デビッド・H・ヤーン・ジュニア……193
「パパのためにお祈りして」……イレイン・S・マッケイ……196
こどもたちのおいのり……197
小さなおともだちへ……ヒュー・B・ブラウン……198
サハラのすなあらし……200
アブラハムのいけにえ……モーリーン・ダン……203
おもちゃばこ……204
自立……ボイド・K・パッカー……205
聞くのが恐ろしいのですか……リンダ・アーチボールド……208
日々の恵み……210
もしもあなたが真心から努めるならば……ポール・H・ダン……211
ローカル・ニュース……214

聖徒の道 4月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10

配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25

定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約1,700円

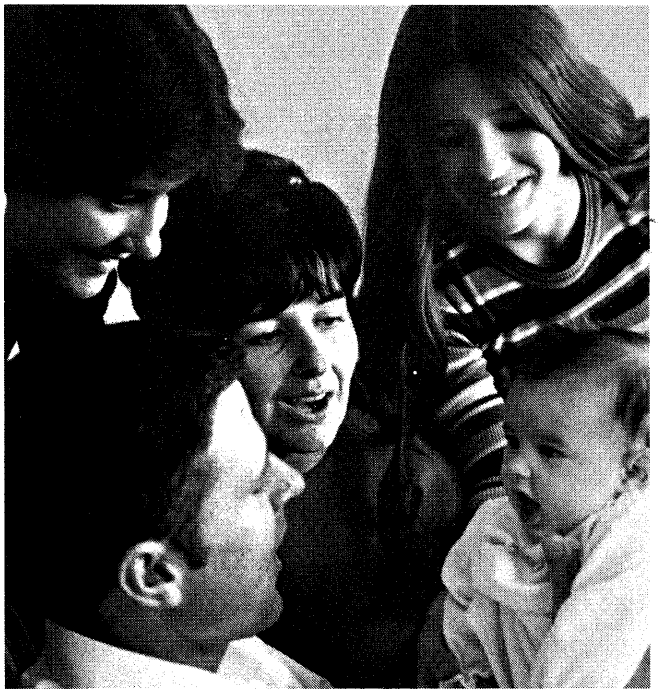
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

大管長会メッセージ

人類への主の計画

大管長
スペンサー・W・キンボール

1975年6月27日の6月大会における説教より



私たちの天父は、人がその幼児期から神の如き者となるまでの成長の計画を立てられた。それは必ずしも容易な道程ではない。だが、私たちの態度いかんによっては、最も価値ある道程ともなりうるのである。

神の計画を、順を追って調べてみよう。モーセは、主の予言者となったとき、偉大な示現と啓示を受けた。モーセは、この世の初めまで、しかもこの地球の創造以前にさかのぼって見ることができた。

アブラハムも同様であった。創造主はアブラハムに次のように言われた。「われは主なる汝の神なれば……われは上は諸天を支配し、下は地を支配し、あらゆる智恵に於て思慮に於て汝の太初より見たるところのすべての英智たちに勝ればなり。」(アブラハム3：19、21)

そして主は、これら前世にいる無数の霊たちの中に立つと、次のように言われた。「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」(アブラハム3：24、25)

「而して、神々、命じたるこれらのものの従うまで見守りたまえり。」(アブラハム4：18)

この後、続いて、鯨や魚や水の中の生き物、翼ある鳥が生じた。

「神々彼らの従うを見、また神々の計画の善しきを見たまえり。」(アブラハム4：21)

そして、水が生命あるもので満ち、空が翼ある生き物で満たされると、神々はこう言われた。「われら、彼らを祝福して、豊に子を産み殖え……しむべし。」(アブラハム4：22)

こうして第5の「時」、すなわち通常、5日目と言われている時は終わった。

次には、生き物、家畜、はうもの、そしてあらゆる種類の獣が生じた。「而して神々かれらの従うを見たまえり。」(アブラハム4：25)

こうして地球を組織してしまうと、神々は会議を開いて言った。「いざわれら降り行きて、われらのかたちに象りてわれらの像の如くに人を造り、これに……治めしめん。」「ここに於て、神々降りて……人を組織したまえり。すなわち……男と女に造りたまえり。」(アブラハム4：26、27)

ここに至ってその計画は完成し、私たちも、また私たちの数知れない兄弟姉妹たちも、自然の法則に従ってこの地上へ来て、それぞれの可能性を伸ばす機会が与えられることになった。

私たちは皆、神の霊の子供である。創造されたものの中でも最高のものである。地球も地球に置かれているものも皆、全人類の進歩と成長のため、また心を満たすために与えられているのである。主は言われた。

「われ誠に汝らに告ぐ、汝ら〔誡命を守れば〕地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。……

然り、すべてこれら季節によりて地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために造られ、眼を楽しませ、また等しく心を悦ばせんためなり。

然り、これは肉体を健にし人に元気をつくるよう、食物、衣服、味、香りのために造らる。

而して、すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして、この目的のためにこれらは造られたり。」(教義と聖約59：16、18－20)

ここで計画は終わり、次にはそれを実行に移すための詳細が考慮されることになった。

こうして第6の「時」となり、神々は次のような計画を立てた。「われら彼らに豊に生ましめて多くの子孫あらしめ、地に充たさしめて地を従わさせむ。」(アブラハム4：28)

これは皆、思い付きによるものでもなければ、創造の過程で偶然に生じた結果でもない。実際の創造に先立って入念に計画されたものである。

こうして、「神々降り来りて天と地の生成を行いたまえ」る日がやって来た。

「神々土の塵をもて人を造り、その人の霊（すなわち人間の霊）をとりてこれをその中に入れ、その鼻孔に生命の息を吹き入れたまえり。その人すなわち生ける『霊の結合体』となりぬ。」（アブラハム５：４、７）

それから「神々……一人の女を造り、これをその男のところへ連れ来りたまえり。」（アブラハム５：16）

これもやはり神が計画されたことであった。

アダムは喜んでこう言った。「われはこれを女と名づくべし……。

この故に男はその父母を離れてその妻と結び合い、二人一体となるべし。」（アブラハム５：17、18）

神々は先に言っておられる。「いざわれらこの人にふさわしき一人の助け手を造らん。この人独りにてあるは善しからざればなり。故にわれら彼のためにふさわしき一人の助け手を造らん。」（アブラハム５：14）

これまで、神々がこの天地創造の計画を立て、人間を含むあらゆるものを造り、さらにあらゆるものに生命を与えられたということを述べてきた。神々がなされたことには、真に目的があったのである。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。

神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ』。」（創世記１：27、28）

次のように言うこともできたであろう。「神は彼らがふえ、地に満ちるよう祝福された。それは、その中にこそ、多くの人々が知らずにいる偉大な祝福があるからである。」

子供は、決して偶然に生まれるのではない。綿密に計画された予定通りの出来事なのである。主は、他の方法で子供を世に出だすこともおできになったはずである。だがそのような場合、世の親たちは、どのようにして子供を愛し、育てていくことができるだろうか。

男の体と女の体は、それぞれが補い合えるように、異なって創造されたのであり、このふたつが一体となることによって妊娠が起こり、この世に生ける霊の結合体を送り出すのである。この霊は、主が幕を引かれたときにあのアブラハムが見た数知れない多くの霊のひとつである。

ここで、主が男と女を造られたのも、その種類に従って子孫を殖やすためであったということを強調しておく必要があろう。以来、数限りなく、このふたつのものは一体となり、男と女を世に出だし続けているのである。そして産み出された男女の体も、今なお時の終りまで神の霊の子供たちを世に送り出し続けることができるように造られているのである。

そして、神々は創造の「時」を終えたとき、被造物が皆ことごとく従ったと言っておられる。皆その言葉に従ったのである。神々は、創造を終えた全世界とその計画とを見わたし、「はなはだ良し」と言われた。

これこそ、この全計画を正しく維持するための最もふさわしい方法であった。これにより、人は世に生まれ出で、成長するための数々の機会が与えられるのである。

偽りの才気やうわべだけの知恵しか持っていない愚かな者に、この計画には失敗があったなどと即断させてはならない。すべての計画が、愛と相互依存の精神で子供たちを世に送り出すことができるよう、入念かつ慎重に考慮されたのである。もし今日多くの人々の間ではびこっているような浅薄な考え方だけで天地創造が行なわれたとしたら、世界も人類もあらゆる正しい事柄も、とうの昔に終局を迎えていたことであろう。

パリサイ人に向かって次のような言葉を言われたのは、他ならぬ主イエス・キリスト御自身であった。まだ地上で伝道しておられた頃のことである。「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ』それ以外のものを造られなかったことを。」（マタイ19：４）

「主の計画はすべて、愛と相互依存の精神で子供たちを世に送り出すことができるよう、入念かつ慎重に考慮されたのである。もし今日多くの人々の間ではびこっているような浅薄な考え方だけで天地創造が行なわれたとしたら、世界も人類もあらゆる正しい事柄も、とうの昔に終局を迎えていたことであろう。」

そして、人はその妻と結ばれるべきであるという戒めが与えられた。また「ふたりの者は一体となるべきである。

彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない。」（マタイ19：５、６）

それゆえ私たちの主は、離婚や家庭の崩壊という悪に対して非常に強い警告を述べておられる。

ふたりの者、すなわち夫と妻（夫と妻のみである）が一

体になるということの当初の目的は、子供たちをこの世に生み出すということであった。性関係が単なるなぐさみであったり、欲望や情欲を満足させるものでしかないということは、主が全く意図されなかったことである。夫婦間の正しい性関係はすべて子供の出産のためにのみ限定する必要がある、という主からのみ言葉があるわけではないが、アダムの時から今日に至るまで、主が放縦な性関係を認められたことがないという証拠は、数多く挙げることができる。

主の計画が秩序正しいものであると知った以上、決して、この神聖な計画を卑劣な目的に供するようなことがあってはならない。

今日、世の中には、全くの思いあがりで、サタンの計画通りの世界を創造しようとしている人々が数多くいる。サタンは悪のはびこるのを心待ちにしているからである。

ある著名な説教者は次のように言った。「性は本来悪ではなく、善なるものを悪用することが可能なだけである。」

女性が苦痛と不安のうちに子供を世に送り出すことは決してたやすいことではない。だが、それでもなお、妻は夫を慕うべきである。夫が妻を管理するからである。また、男は顔に汗してその家族を養わなければならないが、これもやはり容易なことではない。だが、それこそ神の計画なのである。（創世３：16－19参照）そしてそこから、偉大な祝福がもたらされるのである。

聖典の中で、人類の創造について書かれている箇所ではほとんど全部と言ってよいほど、「男と女」という言葉が使われている。モーセは創世記の５章で「神が人を創造された時、神にかたどって造り」（創世５：１）と記録している。これも、何ら不可解な表現ではない。私たちは皆ひとり残らず、神のかたちに造られており、最終的には、神に、王に、女王になりうるのである。

「彼らを男と女とに創造された。彼らが創造された時、神は彼らを祝福して、その名をアダムと名づけられた。」（創世５：２）

アダムという名が彼らの名であった。私は、このアダムという名が、ちょうどキンボールが私の名であり私の妻の名でもあるように、彼らの名字ではなかったかと考えている。

女がアダムのもとへ連れて来られたとき、アダムはその名をイヴと名づけた。「そは、イヴはすべての生けるものの母なればなり。」（モーセ４：26）イヴは最初の母であった。アダムとイヴは人類の先祖となった。ふたりは最初の両親となった。以来この世に生を受けた子供たちは皆、この夫婦の子孫である。

さて、この男女は永遠に結び固められた。神御自身が結び固めをされたのである。神はアダムにその妻イヴを授けた。神は、すべての人々がふさわしい生活をして、この世においても永遠にわたっても続くこの結婚の儀式にあずかるよう教えられた。主はまた、日の光栄の王国における３種の天界、すなわち３種の階級のうち、最も高いところへ行くために次のような条件をつけられた。「人はこの神権の位（すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う）に入らざるべからず。

人もし然せずんばそれを得ることを得ず。」（教義と聖約131：２，３）

これが正しい方法である。

自分から選んで結婚しようとしない男性もいる。このような人たちは自ら祝福を拒んでいるのである。また同じように自ら祝福を拒んでいる女性も数多くいるようである。また機会がないために結婚していない人々もいる。もちろん私たちは、主が幅広く準備を整えて下さっていること、そしてどうしようもない事情のために罪の宣告を受ける人がひとりもいないということを承知している。これは主の計画だからである。

だが、結婚と男女の役割に関して、神に反抗したり、その神聖な計画を無視したりする人がいないようにしようではないか。

「すなわち、聖書に、『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする』と書いてある。

知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。」（Ｉコリント１：19，20）

なぜ神の計画を批判する人々がいるのだろうか。そのような人々はなぜ、人生における彼らの役割を引き受けて、それに感謝することができないのであろうか。

最近、ある地方紙に、勇気ある女性の次のような記事が掲載された。

「聖典では、生涯を通じ男性の最大の責任は、その妻と子供たちにとって、導き手となり、守り手となり、扶養者となることである、と言っています。初めに神が男と女とを創造されたとき、神は女にこう言われました。『あなたは夫を慕い、彼はあなたを治める（『管理する』という言葉の方が好きだが）であろう。』〔創世記３：16〕使徒パウロもこれを再確認して、次のように言っています。『キリストが教会のかしらで…あられるように、夫は妻のかしらである。』（エペソ５：23）」

神は人類の家族を組織されたとき、御自分が何をしておられるのか、よく知っておられた。この女性も、それを信じている人のひとりと思われる。
ひとりと思われる。

私は末日聖徒が皆、老若男女を問わず、生命の水を心ゆくまで飲み、そして主の委ねられた美しくまたわかりやすい責任を果たせるような生活を送って下さるよう、心から希望している。

すでに完璧な計画に口を差しはさむことなく、心を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして、与えられた広大な計画に沿って自らを完き者とする努力を重ねるよう望んでいる。一部の人が失敗したからと言って、その責任を計画のせいにするのは、はなはだ不当なことである。私たちの態度を、行動を、そして全生活をよく整えて、私たちに約束されている豊かなまた数限りない祝福を受け継ごうではないか。

この大いなる神聖な人生というドラマの中で、私たちは神から与えられた責任をどれほど立派に果たせることであろうか。また。何と満たされた生活を送れることであろうか。何と美しい家族を育て、養うことができるであろうか。また、私たちの将来は、何と輝かしいものであろうか。

神は生きておられる。私はそれを知っている。イエスはキリストである。私はそれを知っている。そして、これは主の計画である。私はこのことを知っている。

主は実に生きたもう
われらは主を見たり

アイバン・J・バレット

末日における主の現われは、古代における次のような約束の成就である。「わたしも、……その人にわたし自身をあらわすであろう。……そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。」（ヨハネ14：21、23）

この福音の神権時代は、永遠の父なる神とその愛する御子イエス・キリストが、14歳の農家の少年にそのみ姿を親しく現わされたことから始まった。この少年は、地上に恵みをもたらすために、最も偉大な予言者、聖見者になるよう定められていた。その最初の示現について、この少年予言者は次のように証している。

「私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にふり注いだ。……

そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：16、17）

ジョセフ・スミスに与えられたこの御父と御子の示現を機に、時満ちたる神権時代が始まった。この示現は、神と御子の現われの中でも歴史を通じて最大のものと言われている。

この示現は、それまで何世紀にもわたって教えられてきた神についての誤った概念を沈黙させるものであった。ジョセフ・スミスの時代には、神は「体のない実在」であるという概念が一般に認められていた。

「陽光の中に暖まり、そよ風の中に呼吸する。
星の中にまたたき、木々に花咲く。
あらゆるものの中に息づき、あらゆるものの中に広がる。
分かれることなく広まり、時の経過なく作用する。」
（アレキサンダー・ポープ「人間論」第1巻271－74行）

ポープのこの一文は、確かに何かを美しく描写したものではある。だが、決して聖書に書かれているような、人のひな型となった神のみ姿を描き出したものではない。（創世1：26、27参照）ジョセフ・スミスは神とイエス・キリストにまみえた。御二方とも、英知ある御方として実在し、また私たちと言葉を交えることがおできになるのである。そして、この最後の神権時代においても、10人を越える人々が救い主にまみえ、主は確かに生きておられると証している。

この神権時代に教会が組織されてから初めて開かれた大会の際、ニューエル・ナイトは天が開かれるのを目にし、救い主が御父の右に座しておられるのを見た。予言者ジョセフは次のように書いている。

「将来についての示現が、突然彼に与えられた。そして私の働きによって成し遂げられることになっている偉大なみ業を見た。天が開かれるのを目にし、主イエス・キリストが、いと高き主権者の右側に座しておられるのを見た。そして、やがて主のみ前に来ることが許されて、永遠に共に住まう時が来ることを明らかにされた。」「教会歴史」1：85)

教会の4回目の大会が、1831年6月初旬に開催されたとき、ライマン・ワイトは「みたまに包まれ、その結果、眼前に天が開かれて御子が御父の右に座しておられるのを見た。」「(教会歴史」1：176参照)

1831年初夏のある晩、メアリー・エリザベス・ロリンズという12歳の女の子は、モルモン経についてさらに学ぶために母親に連れられてカートランドの予言者の家を訪ねた。他にも友人や親戚が集まっていた。予言者は部屋に入って来ると、集会を開くことを提案した。その12歳の少女は、次のように書き記している。

「祈りと歌の後、ジョセフが話を始めました。極めて厳粛に、そして熱心に語り出しました。ところが突然話をやめ、その場に立ちすくんだようになりました。彼はまっすぐ前を見つめ、その顔は、彼の後ろのたなで燃えているろうそくの光にも優って輝きを放っていました。ほお骨さえ見えるように思われました。まるで顔の中に照明燈でも入っていて、一つ一つの毛穴からその光が漏れているようでした。私の視線は彼の顔にくぎ付けになっていました。

しばらくすると、彼は極めておごそかな表情で私たちの方を見て言いました。『兄弟姉妹の皆さん、今晩のこの会にどなたがおられたか御存知ですか。』 スミス家のひとりが『主の天使です』と言いました。

ジョセフはこれには答えませんでした。すると予言者の足もとで箱に腰掛けていたマーテン・ハリスがひざまずいたまま予言者の方に寄って行き、予言者のひざをしっかりと抱きしめるとこう言いました。『私にはわかります。私たちの主、救い主イエス・キリストです。』ジョセフはマーテンの頭に手を置くと、こう答えました。『マーテン、神がこのことをあなたにあらわしたのです。兄弟姉妹の皆さん、救い主が皆さんと共におられたのです。これを忘れないで下さい。皆さんがまだ主と直接まみえることに耐えられないために、主は皆さんの目にとばりを下ろされたのです。皆さんには、まだ肉ではなく、ミルクが必要なのです。これが私の口から出た最後の言葉だと思って、しっかりと覚えていて下さい。』」(メアリー・エリザベス・ロリンズ・ライトナーの日記より、未刊、pp．2－4)

1832年2月、ジョセフ・スミスはオハイオ州のハイラムでジョン・ジョンソンと一緒に生活していた。そこで彼は、シドニー・リグドンの助けを得て聖書の改訂作業に従事していたのである。ある日彼らは、人は肉体を受けていたときの行為によって報いを受けるということについて、深くまた熱心に思いめぐらしていた。そしてその結果、聖徒の永遠の住まいを意味する「天」には、ふたつ以上の王国がなければならないという結論に達した。予言者ジョセフは次のように記録している。

メアリー・エリザベス・ロリンズ・ライトナーは、その日記の中で、12歳のとき、ある集会に出席し、そこで予言者ジョセフが「主の天使」が部屋の中にいたと語ったと記録している

「われらこれらの事を思いめぐらせる時、主われらの覚りの眼に手を触れたまいたれば、われらの両眼開けて主の御栄あたりに輝やけり。

而して、われら御父の右に御子の栄光を見、その無上完全なるものを受けたり。

またわれら、聖き天使らおよび御座の前に聖とせらるる者たちが神と子羊とを拝み、しかも永遠に神と子羊とを拝むを見たり。

さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：19－24)

この時、同じ室内に12人ほどの人がいた。その中にファイロ・ディブルという人物がいて、「私は栄光を見、その力を感じた。しかし示現は見なかった」と証している。(「ジュービニル・インストラクター」27：303)

予言者の塾の組織についての啓示の中で、主は次のように言われた。

「故に、汝らの心誠心誠意神に向わんがために、汝ら自ら聖くせよ。さらば、汝ら神を見るの時あらん。そは、神その面を汝らに現わすべければなり。而してそは神の時、神の欲するまま、神の旨によりて起るべし。」(教義と聖約88：68)

予言者の塾で、予言者ジョセフ・スミスは「信仰講話」という題で一連の話をした。この講話の中心テーマは、上記の聖句であった。予言者ジョセフは次のように言っている。

「あらゆるものを創造し支えておられる神が存在するという重要な事柄を人類すべてが知った後は、神を求める誠実さや、忠実さの度合によって神の御性格や栄光についての知識が増し加えられる。この過程を踏んで、人はエノクやジェレドの兄弟やモーセのように、神を信ずる信仰を体得し、顔と顔を合わせて神にまみえる力を得るようになるのである。」（*Lectures on Faith*「信仰講話」No.2，p.23）

その後、主御自身が次のように約束された。「その罪を捨ててわれに来り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誡命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」（教義と聖約93：1）

予言者ジョセフは、カートランド神殿の献堂式の記録の中で「救い主がある人々にそのみ姿を現わされた」と書いている。（「教会歴史」2：432）ジョージ・A・スミス長老はその手記に次のように書いている。

「献堂式の第1日目に、フレデリック・G・ウィリアムス副管長は部屋の最上段に座っていたが、そのとき縫い目のない衣を身にまとった救い主が現われて、その宮居の献堂を嘉納されたと証した。彼は救い主を見たと証し、救い主の衣やそれに関することを詳しく説明した。」（*Journal of Discourses*「説教集」11：10）

カートランド神殿の献堂式を終えて1週間後、予言者ジョセフ・スミスは、オリバー・カウドリ、十二使徒評議会、その他の数人の神権者と共に、神殿内の下の部屋で聖餐式を執り行なった。神権者たちにこの聖餐を配り終えたあと、ジョセフとオリバーは部屋の西側の教壇の所へ退いた。そして、ふたりと他の兄弟たちを仕切る幕が下ろされた。そこでこのふたりは、頭をたれて、厳粛な沈黙の祈りをささげた。やがて祈り終えて立ち上がると、次のような輝かしい示現がふたりの前に開かれたのである。

「われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髪白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声言いたもう。

われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり、父と汝らの間の仲保者なり。」（教義と聖約110：re 2－4）

救い主は十字架にかけられる前に、弟子たちに第2の助け主を送ると約束された。ヨハネはイエスのみ言葉を次のように記録している。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主〔慰め主〕を送って、いつまでもあなたと共におらせて下さるであろう。

……わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。

……そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。」（ヨハネ14：16，21，23）

「『では、別の慰め主とはなんであろうか』とジョセフが尋ねた。『それは、主イエス・キリスト御自身にほかならない。そして、これがあらゆる事の総和であり実体なのである。人がこの最後の慰め主（永遠の生命の約束）を得るとき、イエス・キリスト御自身がその人と共にあり、時に応じてみ姿を現わされるのである。さらに、主はその人に御父をも現わされ、御二方が彼と共に住まうようになるのである。そして天の示現が彼の前に開かれ、主は顔と顔を合わせて教えを授けられるのである。』」（「教会歴史」3：381）

予言者はさらに次のように言っている。

「ヨハネ伝第14章23節参照。この章に見ゆる父と御子の顕現は、人の体を有ちての顕現なり。父と御子と、人の心の中に住みたもうとは古き宗派的観念にして誤りなり。」（教義と聖約130：3）

第二の慰め主、すなわち永遠の生命の約束を受け入れる者は、「聖なる人とその御子イエス・キリストと親しくまた公然と交わりを持つ特権が与えられるのである。予言者ジョセフは、聖徒たちは個人的に父なる神やイエス・キリストと交わりを持つことができる、と教えていた。（「教会歴史」1：283－4；3：381；5：530；6：51参照）

アレキサンダー・ネイバーというユダヤ人は、イギリスで改宗した歯科医であるが、その死の直前、息子から次のような質問を受けた。『お父さん、お父さんはこれまで、お父さんの歩んできた長くて困難な人生についてよく話してくれたし、私たちもそういう話を聞くのが大好きだったけど、ひとつだけ質問させて下さい。そういう大変な経験はそれだけの価値がありましたか？福音はそのような犠牲を払うだけの価値があるものですか？』

証を持ち真理を知っているという満足感で、予言者であり詩人であるこの年老いたヘブライ人の、まさに閉じようとしている目が明るく輝いた。そして高らかに、また確信に満ち満ちた声でこう言った。

『その通り、その通り。全くその通りだとも。私は救い主を見たし、その手の傷跡も見た。イエスが神の御子だということも知っている。この業が真実だということも、ジョセフ・スミスが神の予言者だったということも知っている。その証さえあれば、どんなことにだって耐えることができる。これまでその証のために耐えてきたことを思えば、たとえ荒野でおおかみのえじきになって死のうとも耐えることができるんだよ。』」（*The Utah Genealogical and Historical Magazine*「ユタ系図歴史誌」5：62）

ロレンゾ・スノーは教会員となってから6ヵ月しか経っていなかった22歳のとき、予言者の父である大祝福師ジョセフ・スミスから祝福師の祝福を受けた。この祝福の中で彼は次のように言われた。「汝はジェレドの兄弟の信仰が如き信仰を持つべし。」（Thomas C·Romney, *The Life of Lorenzo Snow*「ロレンゾ・スノーの生涯」1955，p.1）ジェレドの兄弟は偉大な信仰の持ち主であったため、「ジェレドの兄弟が幕の内を見ることを禁ずることはできなかった。従ってジェレドの兄弟はイエスを見て、イエスはかれに導きと恵みとを与えたもうた。」（イテル3：20）

それから数年後、ウィルフォード・ウッドラフ大管長の逝去を知ったスノー大管長は、聖なる神殿着を身にまとい、ソルトレーク神殿の聖壇の前にぬかずいて、主に心の思いを打ち明けた。彼は、ウッドラフ大管長が自分よりも長生きするようにと、また教会を導くような重荷と責任の職に自分が召されることのないようにとどれほど熱烈に祈った

ことかを、思い起こして欲しいと主に再度訴えた。しかし、「あなたのみ心がなりますように。私はこれまでこの責任を求めたこともありませんでした。でもみこころならば、私はこの身をみ前にささげ、あなたの導きと教えを求めます。どうぞ私に対するみこころを示して下さいますように」と、祈り求めた。

この祈りが終わった後、彼は答えを、それも主からの何か特別の現われを期待した。彼は待って待って待って、待ち続けた。しかし何の答えもなければ、声も現われもなかった。彼は深い失意のうちに部屋を出て、日の光栄の部屋を通り過ぎ、彼の部屋に通じる広い廊下へ出た。そしてそこで最も輝かしい現われが彼に与えられたのである。この体験を最も美しく記録した人物の中に彼の孫娘アリ・ヤング・ポンドがいる。ある日、彼女とスノー大管長がソルトレーク神殿の中を歩いていたときのことである。彼女は次のような会話があったと記録している。

「私たちが祖父の部屋を出て、日の光栄の部屋に通じる広い廊下を歩いていたときのことでした。私はそのとき祖父の数歩前を歩いていました。ちょうどそのときおじいさんは私を止めてこう言いました。『ちょっとお待ち、アリ。お前に話したいことがある。ウッドラフ大管長が亡くなられたとき、主イエス・キリストが私にみ姿を現わされたのは、ちょうどこの場所だったんだよ。……』

それから祖父は私の方へ一歩歩み寄ると、左手を伸ばしてこう言いました。『主はちょうどここに立っておられたんだよ。床から1メートル位の所だった。純金の台座の上に立っておられるようだった。』

祖父は、救い主がどれほど栄光に満ちた御方であるか説明してくれました。また、救い主のみ手、み足、表情、それに美しい白衣などについて細かく説明し、それが皆非常な白さと輝きとに満ち満ちていたため、救い主をまともに見ることができないほどだったそうです。

それから祖父は私の方にもう一歩近づくと、右手を私の頭の上に置いて、こう言いました。『アリ。決して忘れないでおくれ。これがお前のおじいさんの証だ。おじいさんは神殿のこの場所で救い主と実際に会って、救い主と顔と顔を合わせて話をしたんだよ。』」(*Deseret news*「デゼレトニューズ」1938年4月2日号p. 8)

予言者ジョセフは、カートランド神殿の献堂式の最中、「救い主がある人々にそのみ姿を現わされた」と記録している

初期の改宗者のひとり、アルフレッド・ダグラス・ヤングは、1841年9月17日の朝、福音の原則について彼の兄弟と話をしていた。そのとき、彼は「みたま」に強く感じて、どこかひとりきりになれる場所へ行きたくなった。そこで彼は、兄弟の家から少し離れた森の中に入ると、「汝、われに従い来たれ」と呼ぶ天使が示現で見えた。

「天使は自分が今来た方向に向かって高く昇って行き、私も天使に従って行った。天使は私を父なる神とその御子イエス・キリストのみ前に連れて行った。御二方と私の間には、仕切りがあった。しかし私には、御二方が玉座に座っておられるのが見えた。私は自分の手に純白の麦の束を握っていた。

私の左側に祭壇があった。またすぐ前にも祭壇があった。私の左側の祭壇は、高さが1メートル、すぐ前のものは50センチほどの高さであった。私は、握っていた麦の束を、主に対する捧げ物として左側の祭壇の上に供えた。私は頭を垂れて、すぐ前の祭壇の上にひざまずいた。その祭壇もやはり玉座の前にあった。

私は御子イエス・キリストのみ名により、祭壇の上に供えた捧げ物を受け入れて下さるよう、父なる神に祈り求めた。

私が祈っている間に、仕切りは取り除かれた。そこで私は立ち上がった。イエスが立ち上がり、御父の側から歩み出て、私の立っている所まで来られた。私は御二方のみ前にいて、その栄光を仰ぎ見ていた。

するとイエスは私に『汝の捧げ物は受け入れられたり。汝その解き明かしを知りたく思うや』と言われた。私が、『主よ、知りたいと思います』と答えると、私を導いて来てくれた天使が、『見よ』と言った。私が見ると、あらゆる国々、血族、国語の民が、数知れぬほど多くの群れをなして神の玉座の回りに上って来るのが見えた。彼らは地にひれ伏して、神を礼拝し、神に栄光を帰していた。そのときイエスが言われた。『この人々は、汝の働きによりてわが御父の王国に導き来たるべき人々なり。しかし、こは、汝が祭壇に供え置きたる捧げ物の解き明かしなり。』」「アルフレッド・ダグラス・ヤング*Autobiographical Journal*「自叙伝」1808－1842、pp.3－13)

オルソン・F・ホィットニー長老は、東部諸州で宣教師をしていた頃、ある晩、次のような示現を受けた。

「私はゲッセマネの園にいて、苦悩する救い主を目撃していたものと思われる。私は人を見るときと同じにはっきりと救い主を見た。私が前方の木の陰に立っていると、イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い、私の右手の小門をくぐって来られるのが見えた。神の御子は3人の使徒をそこに残し、ひざまずき祈るように言ってから、園の反対側へ行きひざまずいて祈られた。聖書を読む者ならばだれでも知っている、あの祈りだった。『わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、私の思いのままにではなく、みこころのま

まになさって下さい』と。

祈っている間、こちらを向いている救い主の頬には涙が流れ落ちた。私はその光景に感動し、純粋な同情の気持から自分も泣いた。心はすっかり救い主に注がれ、私は魂のすべてをこめて救い主を愛し、ほかに何もいらない、ただ救い主のそばにいたいと切望した。

ほどなく救い主は立ち上がり、使徒たちがひざまずいていた所へ行かれた。すると、何と彼らはぐっすり寝入っていたのである。だが救い主は彼らを静かに揺すって起こし、少しも怒りやいらだちを見せずに穏やかな調子でたしなめ、たった1時間も一緒に目をさましていらなかったのかと、悲しげに尋ねられた。救い主が世の罪の耐えがたいほどの重みを双肩に担い、すべての男女子供が受けるべき苦しみにその鋭敏な心を刺し貫かれていたというのに、使徒たちはものの1時間も一緒に目をさましていられなかったのだ。

救い主はもといた場所へ戻り、前と同じ祈りを捧げてから使徒たちの所へ帰ってみると、またもや彼らは眠っていた。救い主は今度も彼らを起こし、再びたしなめてからもう一度戻って祈られた。これが3回も続いて、私は救い主の表情や姿や動作などをつぶさに見ることができた。救い主は堂々たる体軀と威厳ある風貌で、ある画家たちが描いたようなめめしくひよわな方ではまったくなく、幼な子のように柔和で謙遜な、まさに神たるお方であられた。

と突然、状況はそのままで、あたりの雰囲気が変わったような気がした。先刻と違い、十字架にかけられた後で、救い主は3人の使徒と一緒に私の左手に立っておられた。彼らは今にも天に昇って行くところだった。私はもうこらえきれずに木の陰から飛び出して、救い主の足元にひれ伏し、ひざを抱きしめ、どうか一緒に連れて行って下さいと嘆願したのである。

救い主はかがんで私を起こし、腕に抱きしめて下さったが、その穏やかな優しいしぐさを決して忘れることができない。それは実に鮮やかに、はっきりと私の胸に焼きついている。救い主の腕に抱かれると体のぬくもりを感じた。救い主はこの上なくやさしい口調で、『いや、息子よ。これらの者はその業を終えて、わたしと共に行くことができる。しかしあなたはここにとどまり、あなたの業を終えなくてはならない』と言われた。私はそれでも救い主にしっかりと取りすがっていた。私は救い主のお顔を見上げ――というのも主は私よりも背が高かったから――必死の思いで哀願した。『ではどうぞ、いつかみ前に行けるとお言葉を下さい。』すると救い主はやさしくほほえみながら、『それはあなたしだいである』と言われた。」(「聖徒の道」1974年9月号 pp.402－03)

デビッド・O・マッケイ大管長は世界旅行の途中、サモアのアピアへ向かう船の中で、「極めて荘厳な光景を示現で見た。」

「遠くに、美しい白い街並みが見えた。距離はかなりあったが街のここかしこに、芳香な実をつけた木々や、見事な彩りの葉をつけた植え込みや、満開に咲き誇った草花があるのが見えた。上空の青空も、正にこの美しい彩りを反射しているかのように見えた。そのとき私は、一団の大群衆が、その街に近づいている光景が目に入った。その人々は皆、白いゆったりとした衣とかぶりものをつけていた。私はすぐにその群衆の指導者の姿に目が留まった。私はその方の顔かたちを横からちらっと見ただけであったが、すぐにその方がどなたであるかがわかった。救い主であった。救い主のみ姿の輝きは、正に栄光そのものであった。救い主の周囲には安らかさがあった。荘厳な安らかさがあった。――全く神々しい光景であった。

その市は、救い主の市であった。それは永遠の市であった。救い主に従っている人々は、そこに平安な、また永遠に幸福な状態で住むことになっていた。

だが、この人々は一体だれなのか。

救い主は私の胸の内をお察しになられたかのように、その人々の上空に突然現われた半円形のものを指差して、答えて下さった。それには、金で次のような言葉が刻まれてあった。

「この人々は世に打ち勝ちたる人々、真に再び生まれ変わりたる人々なり。」(*Cherished Experiences*「なつかしい経験」p. 102)

今日生きている人々の中にも、個人的に救い主とまみえるという栄えある体験をしたものの、まだその体験を公にすることを禁じられている人々がいる。

誠にこの教会はキリストの教会であり、主は、みこころのままに御自身を現わすことができるのである。

1974年4月の総大会の閉会説教のとき、スペンサー・W・キンボール大管長は、ジョージ・F・リチャーズ長老の述べた夢について話をした。当時、リチャーズ長老は十二使徒評議員会の会長であった。リチャーズ長老は次のように言った。

「私たちが大切な夢を見るにふさわしくないということではない。40年以上前に私はある夢を見たが、それは主からのものであると私は確信している。私はこの夢の中で、中空に立っておられる救い主のみ前にいた。私は主から何の言葉も受けなかったが、主に対する私の愛は、筆舌に尽くせないほどであった。この世の人はだれも、神が示しを与えたまわない限り、私が救い主に対して感じたような愛を主に抱くことはできないことを私は承知している。私はそのまま主のみ前にとどまりたかった。けれどもある力によって私は主から引き離された。

その夢を見た結果、私は、何が求められようと、福音が私に何を求めようと、私に求められるものはたとえ命でも差し出そうという気持に駆られた。……

救い主と一緒にいることができ、あの夢の中で味わった同じ愛の気持を抱けるならば、それこそが私の存在の目標であり、生涯の望みなのである。」(「聖徒の道」1975年2月号p.51)

ジョセフ・フィールデング・スミス大管長は、次のように書いている。

「次のような主の約束を信じている人々が何千何万といる。『その罪を捨ててわれに来たり、わが名を呼び、わが声に従い、わが誡命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。』(教義と聖約93：1)そして、これは、望むならすべての人々が知ることができるよう、全世界に住むあらゆる人々に与えられた約束なのである。」(*Improvement Era*「インプルーヴメント・エラ」33：726)

(アイバン・J・バレットはブリガム・ヤング大学で教会歴史と教義を教える准教授で、BYU第10ステーキ部の祝福師でもある。)

木曜日の夜

デビッド・H・ヤーン・ジュニア

イエスがその身に苦しみを負い、贖いの犠牲を払われた週の5日目、栄えある復活を間近に控えた木曜日のことである。ペテロとヨハネはイエスの指示を受けてエルサレムに出かけ、ひとりの男に会った。そして、その男の家の二階の広間を借りる手はずを整えた。それは、主と十二使徒たちがそこで過越しを祝うためであった。

その夜、一同が集まっていたときに、「自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうか」（ルカ22：24）と言って、弟子たちの間で争論が始まった。このようなことは以前にも何度かあった。そこで主は言われた。「あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。」（ルカ22：26）以前に同様の争論が起こったとき、イエスは幼な子を例に取り、互いに言い争う弟子たちに教えを授けられたことがあった。そのとき、イエスはひとりの幼な子を前に立たせて言われた。

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。

この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。」（マタイ18：3、4）

しかしこの過越しの夜に、イエスはさらに感銘深い模範を示されたのであった。しかもそれにとどまらず、その夜遅く、ゲッセマネで苦しみもだえる中で、さらに大きな例えようのない模範を示されたのである。「その汗が血のしたたりのように地に落ちた」（ルカ22：44）と主の苦しみの深さが描写されている。そして、その夜から翌日にかけて続いた苦しみと屈辱は、十字架上での死をもって終わりを遂げたのである。

ヨハネは木曜日の夜の出来事を次のように記している。

「（イエスは）夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。」（ヨハネ13：4、5）

「こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、『わたしがあなたがたにしたことがわかるか。

あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。

しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。」(ヨハネ13：12－15)

これこそ、だれがいちばん偉いかと争論した弟子たちの問いに答える、最高の貴い模範である。

それから間もなくして主は言われた。「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている。」(ヨハネ13：21) そして主イエスは「一きれの食物をひたして取り上げ」(ヨハネ13：26)、イスカリオテのユダに与えて言われた。「しようとしていることを、今すぐするがよい。」(ヨハネ13：27) 「ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。」(ヨハネ13：30)

切迫した出来事を予期しておられた主は、11名の使徒に次のように述べておられる。

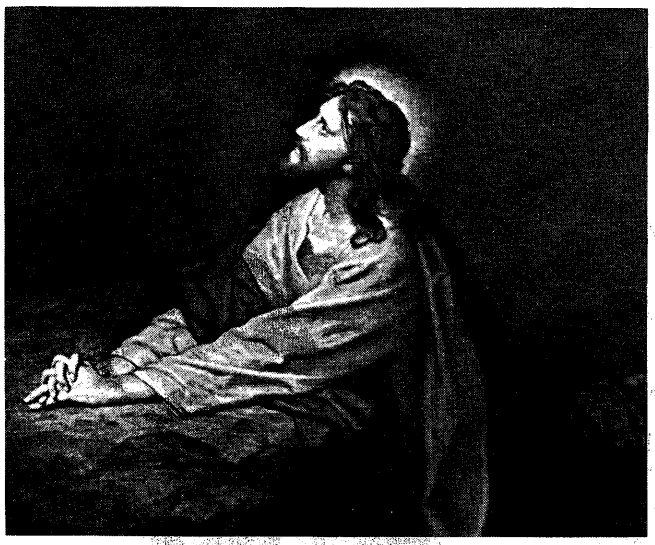
「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。」(ヨハネ13：31)

「子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。……今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。」(ヨハネ13：33)

ここで主は、使徒たちに次のように宣言されたのであった。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13：34、35)



イエスの教えをよく知っている人は、「主は導きと恵みを施す業を始められたときから愛について教えてこられたにもかかわらず、なぜこれを新しいいましめと言われたのだろうか」と、当然不思議に思うことだろう。山上の垂訓の中で述べられた八福の教えの根底にあるものは、愛である。主はその垂訓の中でも、人はその隣り人を愛するだけでなく、次にあげることを行なう責任をも負うと告げておられる。「あなたがたの敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。」(欽定訳マタイ5：44)

主はらい病人を清め、中風の男や百卒長の僕、長血をわずらっている女、そのほか大勢の人を癒し、愛と慈悲とを身をもって示されたのであった。また、おしが物を言えるように、目しいが見えるように、そして耳しいの耳が聞こえるようにされた。主はまた、悪霊を追い出し、やもめの息子やヤイロの娘、それにラザロを死から蘇生させ、彼らをこの世に引き戻したもうたのであった。

主は貧しい者にも心を向けられた。そして、施しをするように人々に教え、御自身も大勢の人々に食物を与えられた。また人々の罪を赦し、人々にも他の人を赦すようにと教え諭された。さらに主は、すべての戒めをふたつの大きな戒めにまとめられた。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」(マルコ12：30、31)

イエスが弟子たちにこの新しい宣告を下されたからと言って、他の戒めが直ちに廃止されたわけでは決してない。むしろ主は、ふたつの大切な戒めを守ることはそれ自体、他のすべての戒めを守ることに結びつくということを、弟子たちによく理解させようとされたのである。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして主を愛する人の中に、その他の主の教えをなおざりにできる者がいるだろうか。

使徒ヨハネは、彼の第一の手紙にこのように書いている。

「愛する者たちよ。わたしがあなたがたに書きおくるのは、新しい戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めである。その古い戒めとは、あなたがたがすでに聞いた御言である。」(Ⅰヨハネ2：7)

さらにヨハネは記している。「これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。」(Ⅰヨハネ3：11)

またヨハネは、主のみ言葉を使って語っている。「しかも、新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。

兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまずくことはない。」(Ⅰヨハネ2：8、10)

以上の言葉を通して愛弟子ヨハネは、愛の戒めが「古く」もあり「新しく」もあることを告げ、イエスの語られた言葉の意味を理解する大切な手がかりを与えている。モーセの時代に記された聖典には、すでにこれらふたつの戒めが

見受けられる。「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。」（申命6：5）「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。」（レビ19：18）

確かに、愛の戒めは「古い」ものであった。しかしヨハネが告げているように、この世に来られたイエスは「まことの光」であり、「新しい戒め」は主イエスにとって「真理」であり、「すでに輝いている」のである。（Ⅰヨハネ2：8、10）主は「まことの光」であり、主御自身その戒めを体現されたのである。

いつの時代にも、イエス・キリストは貴い愛の模範である。主イエスはこの世において、愛の戒めを再び確認された。その結果、これは「新しい」戒めと言われるようになったのである。ヨハネは愛の戒めを「新しく」また「古い」と言及しているが、現代の神権時代においても同様に、福音全体またはその一部は「新しく」かつ「永遠の」という表現をもって呼ばれている。（教義と聖約22：1；132：4）

しかし主は言っておられる。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。」この聖句から明らかなように、主は「新しい戒め」にさらに別の意味を持たせ、弟子たちへの新しい標準とされたのであった。以前は「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と教えておられたが、今は「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と告げられたのである。人間の限りある思いを愛の標準として用いることは、もはや適当ではなかった。神の下された標準、言い換えれば主御自身を愛の標準としなければならないのである。

主はニーファイ人の12人の弟子にも同様のことを教えられた。「汝らはいかなる人物にてあるべきか」と彼らに問いかけ、続いて「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」と御自らそれに答えておられる。（Ⅲニーファイ27：27）主は神から下された標準であり、私たちは自分たちの生活をその標準に添ったものとしなければならないのである。

モルモン経の偉大な予言者は、「新しい戒め」にさらにもうひとつの考え方を加え、イエスを愛の模範としている。

「この愛はキリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。

それであるから、私の愛する兄弟らよ、あなたたちは、神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。これはまた、あなたたちが神の子らとなるためである。神の現われたもう時には神をそのありのままの姿で見るにちがいないから、その時には神に似た者になることができるためであり、また私たちも神のように清められると言う望みを持たんがためである。アーメン。」（モロナイ7：47、48）

息子モロナイが記したこのモルモンの教えから、キリストの純粋な愛、すなわちキリストが有しておられる純粋な愛こそ、全人類が持つようにと主の望んでおられる愛であることがわかる。

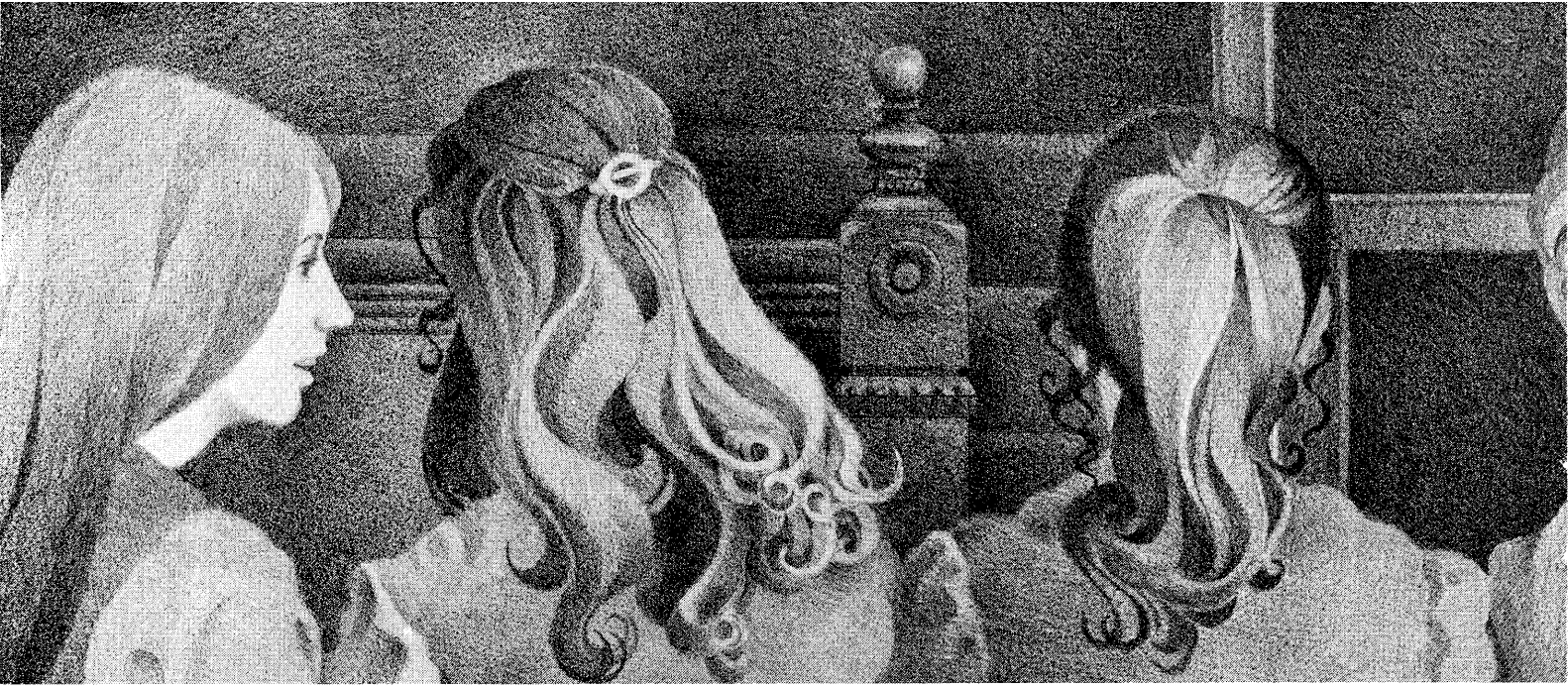
聖典はまた、「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える」と言われた主の言葉に、もうひとつの意味があることを告げている。主がその使徒たちに次のようにも言われたからである。「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」（ヨハネ13：35）

主が以前に弟子たちに与えられた愛の教えは、全人類を愛するようにというものであり、すべての人を愛せよ、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよという、一般的な戒めであった。しかし、だれがいちばん偉いかと十二使徒たちの間で争論があったときに、主は「新しい戒め」を下されたのである。その夜、他の弟子たちは知らなかったが、弟子のひとり、イスカリオテのユダは主と仲間を公然と裏切ろうとしていた。そしてほどなくして、主は御自分の命を捧げ、この上ない愛の模範を示そうとしておられたのである。このような状況の下にあって、主は、以前に与えられていたような広く一般的なものではなく、明確で非常に具体的な愛の戒めを与えられたのであった。すなわち弟子たちに、御自分が彼らを愛したように、彼らも互いに愛し合うよう告げられたのである。そしてさらに、互いに愛し合うならば、彼らが主の弟子であることをすべての人が認めるであろうと告げられた。一般の人々を愛するだけでは十分ではない。弟子たちはそれぞれ互いに愛し合わなければならないのである。

以上をまとめると、聖典は主の「新しい戒め」に関して少なくとも次にあげる3つの基本的な考え方を述べている。第1に、回復された福音が「新しく」かつ「永遠の」誓約を表わすと同様に、愛の戒めは「新しく」かつ「古い」ものである。第2に、「新しい戒め」はより高い愛の標準を全人類に与えている。主は「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と弟子たちに命じられた。第3に、互いに愛し合うことが弟子たる証拠であると主は宣告された。偽りの博愛主義者は、「全人類を愛する」という格好の隠れみのでその身をおおう。「全人類を愛する」だけでは十分でない。主の弟子たちは互いに愛し合うのである。

これは当時の十二使徒に与えられたチャレンジであり、彼らはそれを十分に意識していたように思われる。そしてこの弟子たちと同じようにキリストを愛の標準とする私たちは、なお一層謙遜にならざるを得ないのである。

（デビッド・H・ヤーン・ジュニア：ブリガム・ヤング大学哲学科教授であり、メルケゼデク神権教科課程準備委員会の一員として働いている。現在、オーレム・ユタ・シャロンステーキ部オーレム第23ワード部に所属している。）



「パパのためにお祈りして」

イレイン・S・マッケイ

私は21年前の4月に、教会の総大会で、初めてソルトレーク・タバナクルを訪れました。建物の大きさにも圧倒されましたが、それ以上に、そこに集まった大勢の教会幹部を目にして、恐れに似た気持を覚えたものです。

それまでにも、教会幹部は何人もモンタナ州の私たちの小さな支部を訪問していました。当時はテレビがありませんでしたし、ラジオで大会の模様を聞くこともできませんでした。ですから私たちは、教会幹部の訪問を特別な祝福として待ち望んでいたのです。彼らは他の人たちよりも大きな力と信仰を持っているように、私には思えました。

そして21年前の4月、私は教会幹部の力の源をひとつ発見したのです。

私は、エズラ・タフト・ベンソン長老の6人のお子さんたちと並んで席に着きました。ひとりが私の大学のルームメイトだったからです。マッケイ大管長が席を立って次の話し手を発表されたとき、私の関心はますますつのりました。マイクに向かうベンソン長老を、私は尊敬のまなざしで見守りました。私はそれまでに一度もベンソン長老にお会いしたことがありませんでした。長老は180センチは軽く越す背丈の高い方でした。博士号を持ち、合衆国農務長官として国際的に知られており、主の特別な証し人で、確信に満ち落着いて見えました。世界中の人々に演説をしてきた方です。そのとき突然、だれかの手が私の腕に触れました。小さな女の子が体をもたれて私に言うのです。「パパのためにお祈りして。」

私はちょっと驚いて考えました。この列に伝わっているのだわ。それなら私も隣りに伝えなくちゃ。『ベンソン長老のためにお祈りして』と言うのかな。それとも『お父さんのためにお祈りしてって言ってるわよ』と言うのかな。」ぐずぐずしていられないと思ったので、私はただ、「パパのためにお祈りして」と耳うちしました。

見ていると、そのささやきは列を伝わってベンソン姉妹の席まで届きました。姉妹はすでに頭を垂れていました。

私はあの日から、パパのためにお祈りして、家族の祝福師である父親のためにお祈りをして、というあの言葉を幾度も思い出してきました。地方部長として、あるいはホームティーチャーとして働くお父さんのために祈って下さい。市民グループの責任者になったときや、仕事が順調なとき、サラリーがカットになったとき、お父さんのためにお祈りして下さい。家庭の夕べでお父さんが教えるとき、祈って下さい。息子が伝道に行けるように、娘が大学に行けるように遅くまで働くお父さんのためにお祈りをして下さい。お父さんが聖餐会で話をするときや、病気のお母さんが良くなるように祝福をするとき、お父さんのために祈って下さい。子供にバプテスマを施すとき、生まれたばかりの小さな赤ちゃんに命名して父親の祝福を与えるとき、お父さんのために祈って下さい。夜になってお父さんが疲れたり落胆したりして帰ってきたら、お父さんのために祈って下さい。小さなことでも大きなことでも、なすこと全部についてお父さんのために祈ってあげて下さい。

あれから歳月が過ぎる間に総大会は何回も巡ってきました。私はベンソン長老が立って話されるたびにいつも、「アメリカの各地に移り住むようになったお子さんたちは、今もひとつになってお父さんのために祈っているにちがいない」と考えるのです。

そして私は、21年前に大会のあの席でささやき伝えられたあの言葉が、家族にとって最も大切なことなのだと考えるようになりました。どこにいても「パパのためにお祈りして」とささやく娘や息子を持つお父さんは、毎日のチャレンジと取り組んでいる間も、どれほど大きな力と信仰が持てることでしょう。

こどもたちのおいのり

ある日のゆうがたのことです。大ぜいのきょうだいたちが、よげんしゃジョセフのいえにあつまってきました。ジョセフが、ぼうとたちにころされるかもしれないので、どうしたらよいか、そうだんするためでした。

こどもたちも、へやにあつまって、こどもにはなにができるかしら、とはなしあいました。すると、7つの女の子がいいました。「おいのりしましょうよ。ジョセフきょうだいを、まもってくださいって。」

こどもたちは、おいのりをはじめました。そのとき、よげんしゃジョセフが、そのへやのまえを、とおりかかりました。ドアが少しあいていたので、おいのりのこえが、きこえ、こどもたちのすがたがみえました。おいのりがおわると、ひとりがいいました。「ジョセフきょうだいは、もうだいじょうぶだよ。」

よげんしゃジョセフは、そっとなみだをふき、きょうだいたちがあつまっているへやへ行って、いいました。「わたしは、もうだいじょうぶです。どうぞみなさん、いえにかえって、やすんでください。」

ちいさなおともだち7

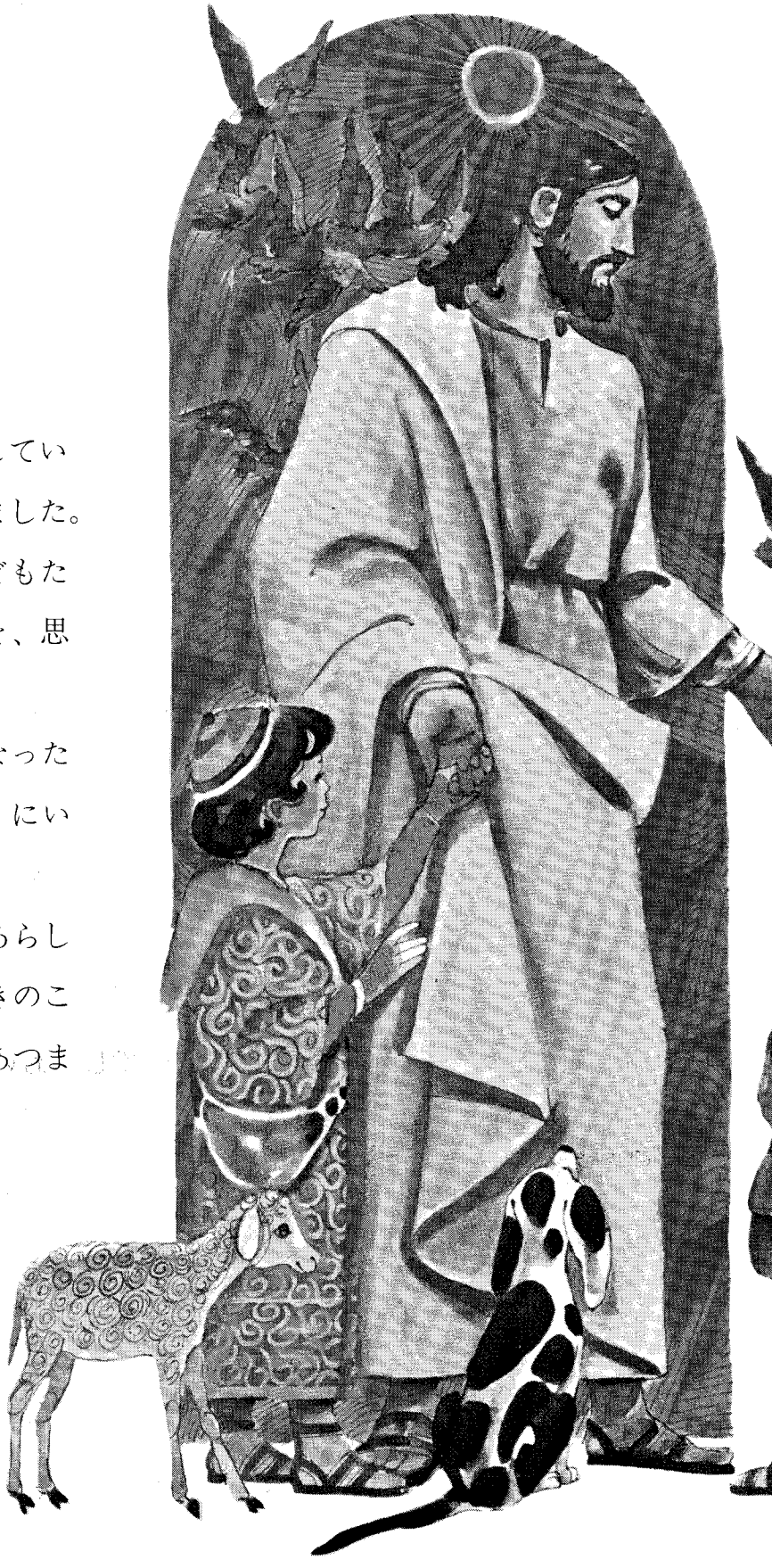
十二しとひょうぎいん会会いん
ヒュー・B・ブラウン

わたしは、イエスさまがでんどうしていらっしゃったところを、りょこうしました。

そして、イエスさまが、いつも子どもたちを、あいしていらっしゃったことを、思い出しました。

エルサレムで十じかにおかかりになったあと、イエスさまは、アメリカ大りくにいらっしゃいました。

アメリカ大りくでは、大じしんやあらしで、たくさんの人がしにました。生きのこった人たちが、しんでんのまわりにあつま



り、ものすごかったじしんやあらしのことを、かたりあっていると、天から声が聞こえました。なにをいっているのか、だれにもわかりませんでしたが、3どめにやっとそのいみがわかりました。その声は、こういっていました。

「わたしのあいする子を見よ。……そのことばに耳をかたむけよ。」

イエスさまがおりて来られると、人々はそのまわりにあつまり、手足のくぎあとや、わきばらのきずにさわりました。そして、口々にあかしをし、「ホザナ、いと高き神をほめたてまつる」とさけびました。

イエスさまは、びょうきの人をいやしました。それから、小さな子どものいるお父さんやお母さんに、子どもたちをつれてくるように、おっしゃいました。イエスさまは、子どもたちといっしょにひざまずいて、なみだをながしながら、おいのりしてくださいました。

小さいきょうだいしまいたち、いつでもイエスさまのお名前によって、天のお父さまに、おいのりしてください。『夕がたには、なんておいのりできるかな』といつも考えているようにしてください。』そうすれば、わるいことはしなくなるし、こまったときにも、それを切りぬける力ができます。いつも、イエスさまのみかたになりましょう。イエスさまは、はかりしれないあいで、わたしたちを、あいしてくださるのです。

サハラというのは、「ちゃいろの無」といういみだ。行けども、行けども、ちゃいろのすなと、青い空、じりじりとてりつけるたいよう、さばくのはてからやって来て、さばくのはてへときえて行くキャラバン。それがサハラだ。

カシムはくたくただった。足がおもくなって、よろよろしてばかりいた。でも、はじめてのたびだ。とちゅうで、らくごしたくはなかった。

「もうちょっと早く歩けないのか。あいつは、まだだめだな。のこって、ラクダの

サハラのすなあらし

モーリーン・ダン

ばんをしていればいいのに、ノコノコついて来られちゃ足手まといだ。」 だれかがいっているのが聞こえた。カシムは、くやしくて、なさけなかった。なみだをこらえながら、だまって、いっしょうけんめい歩いた。がまんしていても、ときどきためいきが出た。「みんな、なんであんなに足がつよいんだろう。」もう、なき出したかった。

カシムは空を見上げた。あれ、少しくらくなってきたな、と思うや、見る見るうちに黒いものが、空をおおいはじめた。すなあらしだ。男たちも、じっと空をにらんでいる。黒いはだ、ひたいのふかいしわ、小さく黒く光る目、しっかりとむすんだくちびるが、すなあらしのおそろしさを、かたっていた。

「ラクダをあつめろ、このまますすむぞ、ラクダをはなすなよ。」 カシムのお父さんがさけんだ。しんけんな声だった。耳もとで、風がびゅうびゅうなった。からだにまきつけたぬのが、ちぎれそうだ。すなが手や足にふきつけてきて、いたい。はなやのどにも、はいってくる。もう、目もあけていられなかった。カシムは、ラクダにぴったりと、からだをよせて歩いた。

風の音はぶきみだった。びゅうびゅうとふきすさび、やむことがなかった。カシムは、ただ歩いた、どのくらい歩いただろう、ふと目をあげると、だれもいない。

「お父さん」カシムはさけんだ。「お父さん、お父さーん。」 こたえはなかった。カシムは、ひっしで歩いだ。もう、どこからが空で、どこまでが地面かわからなかった。なんにも見えず、どこを歩いているのかもわからなかった。足首までが地面なのか、こしのあたりまでなのか、それとも頭の上までかもしれなかった。

と、カシムは、なにかやわらかいものにつまずいて、ころんだ。「ラクダだっ！」カシムは、むちゅうでしがみついた。「ああ、ラクダだ。」ラクダが歩くと、カシムも歩いた。ただ、いっしょうけんめいに歩いた。歩いていると、きゅうにラクダがはっきりと見えてきた。

「すなあらしが、やむらしい。ああ、たすかった。もう、だいじょうぶだ。」 風がおさまり、あたりが明るくなってきた。もう、とおくの方もよく見えた。しかし、まわりにはだれもいなかった。どこまでも、どこまでも、ちゃいろのさばくが、つづいているだけだった。こころぼそかった。

「お父さーん。」 声もかすれてしまっていた。3じかんも、すなあらしの中を歩いて、のどがカラカラになっていたのだ。「お父さーん、お父さーん。」 カシムはよびつづけた。ただ、こころぼそかった。

「カシーム。」 カシムのむねはふるえた。でも、そら耳かもしれない。カシムは声のする方を見た。黒い人かげが見えた。

「ああ、お父さん！」 二人はかけよった。

「けがはないか、カシム。」 お父さんはにっこりした。カシムは、お父さんの、こんなうれしそうなかおを、見たことがなかった。

「ラクダもいるな、よーし。さあ！ たびをつづけよう。」

カシムは、前よりもしっかりと、地面をふみしめた。

アブラハムのいけにえ

アブラハムもサラも、長いこと、子どもがほしいと思っていました。

ある日のことです。3人の天のみつかいがやって来て、サラに男の子が生まれるだろうといいました。ふたりとも年をとっていましたから、そんなことは、とてもしんじられませんでした。しかし、そのよげんはほんとうになり、その子はイサクと名づけられました。「イサク」というのは「よろこび」といういみです。

しばらくたった、ある日のことでした。主はアブラハムに、イサクをいけにえとしてささげなさい、とおっしゃいました。アブラハムは、「はい」とこたえました。

アブラハムのむねの中は、どんなだったでしょう。なにも知らず、サラにわかれをつげて、じぶんがいけにえになるばしょへ行くイサクを見て、かなしみをこらえるだけで、せいーぱいだったのではないでしょうか。3日のたびをしたのち、アブラハムはイサクだけをつれて、山にのぼりました。

イサクがいいました。「お父さん、たきぎはあるけれど、いけにえの小ひつじがいないね。」あわれなアブラハムは、イサクを見つめて、「神さまが、よういしてくださるよ」というばかりでした。ふたりは石をあつめ、その上にたきぎをならべました。アブラハムはイサクの手足をしばり、さいだんの上にのせました。かなしみに、むねもはりさけんばかりになりながら、イサクをころそうとナイフをふりあげたそのとき、みつかいの声がしました。

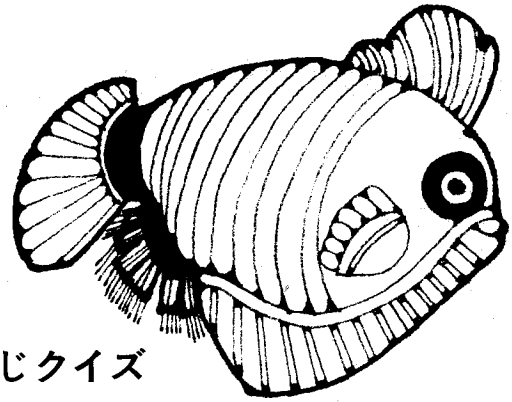
「アブラハムよ、アブラハムよ。」

「はい、ここにおります。」

「イサクに手をかけてはならない。……あなたは神のために、ひとり子さえおしまなかった。それで十分である。」

アブラハムがふと目をあげて見ると、そこにはひつじがつないでありました。

ふたたび、主のみつかいの声が聞こえました。「主がいわれました。『あなたのしそんを天のほしのようにふやそう。……あなたが、わたしのことばにしたがったからである』。」



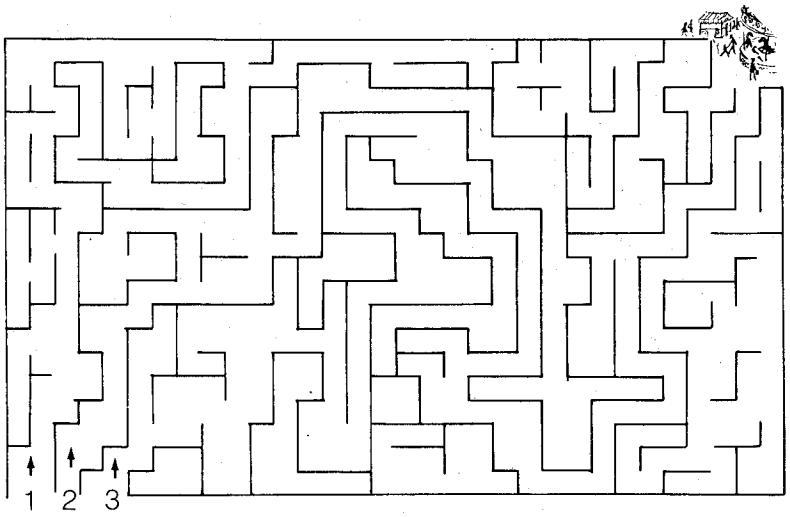
おもちゃばこ

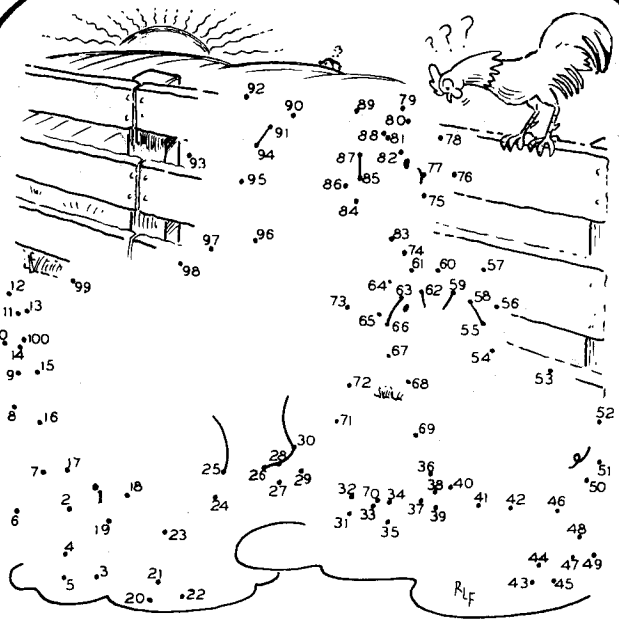
すうじクイズ

3から11までのすうじをいれて、たて、よこ、ななめのごうけいが、ますのなかにかいてあるすうじにあうようにしましょう。

↘↓→	↓	↓	18
→			20
→			25
23	17	23	13

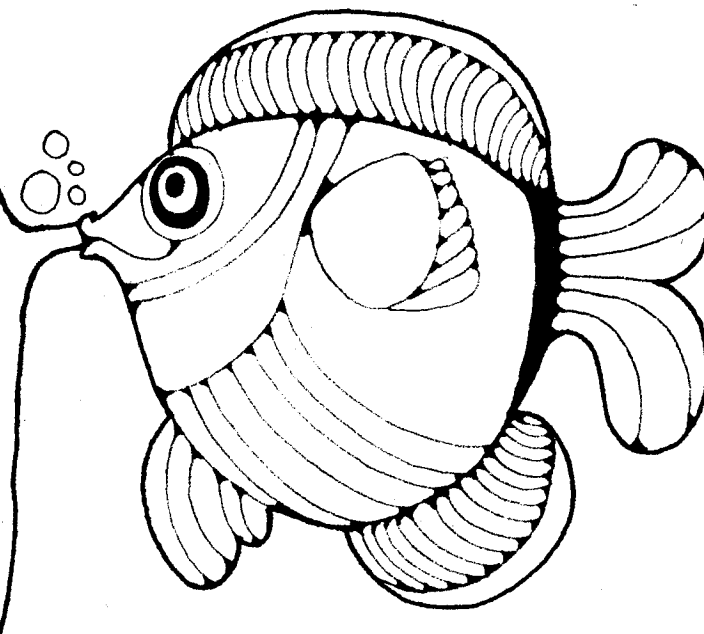
1、2、3のどのみちをとおったら、ゆうえんちへいけますか。



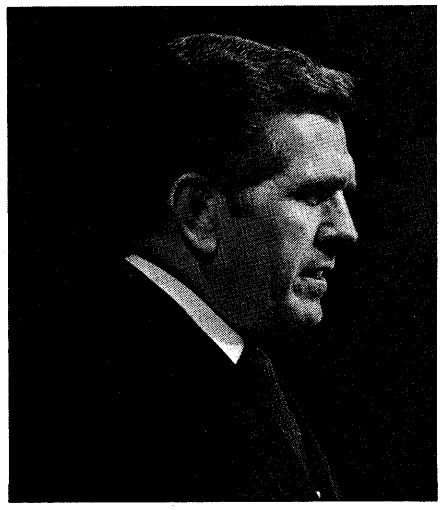


てんをむすんでみましょう。

オンドリさんは、だれとおはなししているのかな。



1975年5月2日に行なわれたブリガム・ヤング大学のファイアサイドでの講演から



自　立

十二使徒評議員会会員
ボイド・K・パッカー

教育の原則の中に、転移というものがあります。今日私はこの原則を利用して、教会でもおなじみのプログラムについて話をし、それからこの根本的な原則を、生活の他の面にも転移させてみたいと思っております。まず最初に、教会の福祉計画の根本的な原則について、少し復習してみたいと思います。でも、教会福祉が私の今日の講演のテーマではありません。ただある問題点を説明するためにだけ、使うつもりでいます。

教会が組織されてから2年後、主は次のような啓示を与えられました。「怠惰なる者は悔い改めて行いを改むるにあらざれば、教会の中にて地位を与えらるることなし。」(教義と聖約75：29) マリオン・G・ロムニー副管長は、先日の総大会の折、この原則を、ロムニー副管長特有の簡潔明快さで、次のように説明されました。「人類は生存し始めたそのときから、自活する義務を神より課せられたのです。『あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。』(創世3：19)」

「福祉計画の手引き」では、このように指示してあります。「教会員に力の及ぶ限り自立するように、熱心に教え、勧めなければならない。本当の末日聖徒は、……自立する責任を決して回避することはない。全能者の霊感と自分自身の労働によって、可能な限り生活に必要なものは自給していくのである。」(1969年版、p.2)

これは、現在までかなりの成功を収めています。末日聖徒の心の中に、自分たちに必要なものは自分で得なければならず、また生活必需品を自給できない人のためには福祉援助をしなければならない、という考え方が定着してきているからです。もし教会員が自活できない場合、まず自分の家族に援助を求めるべきです。その後、教会に求めます。これが正しい順序です。

1936年に、教会の福祉計画が初めて紹介されたとき、大管長会は次のような声明を出しました。

「私たちの第一の目的は、可能な限り、いまわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除き、独立心、勤勉、倹約、自尊心を再び私たちの間に確立する体制を築くことである。教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」(大会報告、1936年10月、p.3)

ロムニー副管長は次のように強調されました。「その他の体制では、人々すなわち聖徒の世話をすることは善よりもむしろ害悪をもたらすものなのです。教会福祉の目的は、自立を妨げるものではなく…。」(福祉事業集会、1974年10月5日)

私は福祉計画のこの原則を受け入れていますし、また支持しています。しかしながら、かなり多くの地域で、またかなり様々な面で、教会員はこの原則から離れつつあります。自立の原則は幸福な生活にとってその根幹となるものです。

この同じ自立の原則が、精神面でも、霊的な面でも同様にあてはまります。教会には、精神的にも、霊的にも、全面的に他人に依存しているように見受けられる人々が多過ぎます。そのような人々は、一種の精神面の福祉制度に頼っているのです。決して自立しようとはしません。他人に頼ってばかりいるため、絶えず他人の支えを必要とし、また絶えず激励を必要としているのです。その上、自分から進んで何かするということはほとんどありません。

もし私たちが、精神的かつ霊的に自立する気持を失ったとしたら、私たちは想像以上にひよわになる可能性があります。物質的に人に頼ることの比ではなくなってしまうでしょう。一方私たちは監督に、教会の福祉計画では施しを避けるよう教えています。しかしその一方では、助言や勧告がいとも簡単に与えられているように思えます。教会員は自分で問題を解決するようにすべきです。そうでなければ家族と共に考えるべきです。それで適当な答えが得られないときだけ、教会の世話になるべきなのです。

私たちは注意していないと、自分で啓示を受ける力を失うことにもなりかねません。主はオリバー・カウドリに次のように言われました。この主のみ言葉は、私たち全員に関係があります。

「見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願いし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこと正しきか否かを汝問わざるべからず、願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感ぜしむ。

されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。」(教義と聖約9：7－9改訳)

かなりの問題は聖典を読むことによって解決ができますが、そんな経験はなかったでしょうか。私たちは皆一人一人が親しく啓示を受けられるようにすべきだと思います。精神的な自立のひとつとして、聖典を読むよう勧めます。

私は指導者たちが簡単に助言や勧告という施しをしているのではないかと心配しています。教会に問題の解決を求める前に、まず個人の力を、それから家族の力を借りるよう、会員に要求すべきです。

ある学生が私のオフィスへやって来ま

した。私は彼とは個人的な面識がありました。彼は大変な問題をかかえていました。結婚すべきかどうか、決めかねていたのです。私は彼に「助言を求めに来たの？」と尋ねました。

彼は「ええ、本当に欲しいんです」と言いました。

そこで私は「君に助言したら、君はそれに従うつもりかい？」と尋ねました。

彼は少し驚いたようです。でもどうにか、「はい、従うつもりです」と答えてくれました。

私はたまたま彼の父親をよく知っていました。教会の祝福師で、本当に素晴らしい人でした。そこで私はこう言いました。「この週末に家へ帰って、お父さんに話してごらん。寝室でもどこでもよいから、静かな部屋にお父さんを連れていって、君の問題や悩みを全部話すんだ。そしてお父さんに助言を求めて、お父さんの言う通りにしてごらん。これが私の助言だよ。」

精神的な施しの制度は、物質的な施しの制度と同じ位、危険な要素を含んでいると思います。私たちは他人に頼るあまり、ただ待ってさえいれば、教会が何もかもすべてしてくれるような錯覚にとらわれることがあります。

ほとんどすべてのワード部支部に、四六時中勧告は求めるものの、与えられた勧告には従ったことがないという慢性疾患の患者がいます。これを大したことではないと思う人がいるかもしれません。しかし私は、これは極めて重大な問題であると思います。普通の風邪と同じように、他のどんな病気にも増して、人から強さを奪っていくものなのです。私にはどうも、この流行性「勧告病」がはびこっているように思えて仕方ありません。これは教会の霊的な強さを骨抜きにしています。霊的な自立心は、教会を支える力です。もしその力がなければ、どうして神の予言者がいるという啓示を受けることができるでしょうか。どうして祈りの答えを受けることができるでしょうか。どうして知ることができるでしょうか。もし私たちがすぐに皆さんの質問にすべて答え、あらゆる問題を解決する数々の解答例を用意していたとしたら、結局は皆さんは弱くなりこそすれ、決して強くはならないのです。

教会の福祉計画の基礎となる根本原則が、精神的かつ霊的な面の生活にもあてはまるということに納得がいったと思いますが、もう少し詳しく繰り返してみましょう。独立心、勤労、倹約、自立、自尊心を確立すること、勤労を再び教会員の生活を貫く原則とすること、精神的かつ霊的な施しのもたらす悪弊を除くこと、人々が自立するのを助けることに教会の目的をおくこと、などです。これらの原則に心から同意できたならば、次にもう少し皆さんのために、原則と提案をお話したいと思います。

思い出して下さい。教会員がまず自分の資産を使い果たし、その後家族からの援助も使い果たした場合、その会員が福祉援助を受けるのに何のきまり悪さも感じさせてはならないという原則があります。同様に、真に勧告を必要としている教会員に対し、助言を求めるのにきまり悪さを感じさせるようであってはなりません。時には、助言を求め、それを受け入れることが極めて重大なことかも知れないからです。

皆さんが落胆し、自分の力では問題の解決ができないと感ずるとき、それはそれで正しいのかも知れません。でも少なくとも、自分でやってみるだけの責任はあります。次の段階へ行く前に、自分で可能な限りの手段や方法を使ってみなければなりません。皆さんには強い力が与えられています。モルモン経にはそのことが書かれています。よく引用される箇所ですが読んでみましょう。

「……それは、『みたま』は昨年も今日もいつまでも同じにましますからである。そして贖いは、人類の始祖が堕落した時からすでに用意せられてあってしかも救いは無料で自由である。

人は皆善悪をわきまえることを充分に教えられている。」（IIニーファイ2：4、5）

自分が善悪をわきまえる存在であるということを理解することは、極めて大切なことです。皆さんは生来、本質的かつ直観的に、善なる存在なのです。「できない。自分には問題の解決ができない」という人もいるでしょう。そういう人に、私はこう叫びたいと思います。「自分が何者なのかわからないのですか。自分が全能の神の息子、娘であるということを知らなかったのですか。神から大いなる力を授かり、堅実さと勇気と偉大な力とを求めて祈ることができるということを知らないのですか」と。

皆さんは福音を教えられています。皆さんは、善悪の区別を知っています。では、今こそ正しいことをしようと決心するときではないでしょうか。そうすることにより、皆さんは選択をすることになります。一般的な選択ではなく、その問題にかかわる選択をするのです。ひとたび決心してしまえば、あとはもっと容易になってくるはずです。

ステーキ部長、支部長、監督そしてその他私たち教会幹部のところへも、勧告を求めて多くの人々がやって来ます。しかしそのほとんどは、彼らが混乱しているからでも、善悪の区別がつかないからでもありません。心の奥深い所に、自分で悪いとは知りながらやってみたいことがあって、それを認める決定をしてもらおうと思ってやって来るのです。

何か問題があれば、まず自分の心の中で考えてみて下さい。深く考え、分析し、熟考するのです。聖典を読み、その問題について祈るのです。私は、重大な決定は強制されるべきものではない、ということを経験から知っています。将来を見通しビジョンを持つ必要があります。旧約聖書で予言者は何と言っているでしょうか。「預言がなければ民はわがままにふるまう」（箴言29：18）と言っています。

毎日少しずついろいろなことについて深く考え、一時に数多くの重大な決定をせざるをえないような破目に陥らないようにして下さい。絶えず人生の先々を見通していれば、重大な問題が起こるときには予期できるはずです。そして問題を解決する必要が生じたときには、すでにその準備が整っているのです。時折、不意に重大な決定を迫られることもありますが、それほどたびたびあるわけではありません。すでに正しいことをする決心がついていれば、必然的に良い結果が生まれて来ます。その過程で傷つけられることもありません。

私は、経験から、重大な問題と取り組む最適の時間帯は、朝の早い時期だと考えています。朝は心もさわやかですし、反応も敏感です。肉体的にも充分休息が取れています。この時間帯こそ、物事について丹念に考え、かつ個人的に啓示を受ける時なのです。

私は、ハロルド・B・リー大管長が啓示を含む何か大切なことを話されるとき、いつも決まって次のような表現をされるのをよく耳にしました。「朝早く、その問題について深く考えていたとき」という表現です。リー大管長は、啓示を必要

とするような問題について考えるとき、朝早く起きてすがすがしい気分で仕事をするのを習慣にしていたのです。

主は教義と聖約の中で次のような指示を与えておられる。

「度を過ぎて眠るを止めよ。早く臥床に入りて疲れを休めよ。朝は早く起きて汝の肉体と精神とを活気づけよ。」(教義と聖約88：124)

何か差し迫った仕事――例えば、私のこの話の準備などがそうですが、そういう仕事があったとしても、私は決して夜遅くまで起きているということはありません。むしろ早くベッドに入って、翌朝早く起きます。そうすれば主に近くなって、この仕事についての導きを受けることも可能になるわけです。

今度は、啓示についてお話ししましょう。啓示というものは私たちは一人一人が受けることのできるものであると教えられています。私が啓示に関してよく尋ねられる質問に、こういうものがあります。「啓示を受けたかどうかはどうしてわかるんですか。私はこの問題について祈り、断食し、また祈り、さらに祈ってみました。でもどうすべきかまだわかりません。誤りを犯さないためにも、霊感を受けたということは一体どうしたらわかるんですか。」

まず第一に、問題を携えて主のもとへ行き、あなたに代わって決定をして下さるよう主にお願いしていませんか。自分で考えて、啓示について読み、熟考し、祈り、そして自分で決定を下しているのでしょうか。善悪をわきまえているのですから、その観点から問題を判断し、決定を下すことです。それから主に、その決定が正しいかどうかを尋ねるのです。主がオリバー・カウドリに、「心の中によく思い計り」と言われたことを忘れないで下さい。

これだけはよく覚えて下さい。私たちが愚かにも監督や支部長や主のもとへ行き、私たちに代わって決定を下して下さるよう頼んだとしたら、そこには自立心のかけらもないということです。皆さんがだれか他の人に、代わって決定を下してもらうとしたら、それだけでどれほど貴重な時間を失うことか、考えてみて欲しいと思います。

もうひとつのことをお話したいと思います。でも、この話を誤解しないで下さい。よく若い人々の中で、ある物事について誠心誠意、一生懸命祈ったのだからもう自分たちで決定を下す必要はないと思っている人々がいます。例えば、ある夫婦が家を建てるに必要なお金を持っていたと仮定しましょう。この夫婦はどのような建築様式にするか、絶えず祈っていました。しかし、恐らく主はこのようなことにはさほど関心がないのではないかと思われます。皆さんにもこのような経験はないでしょうか。自分たちの建てたいものを建てればよいのです。それは好みの問題です。多くの点で、私たちは自分たちのしたいことができるのです。

ただ、主が非常に関心を持っておられることもあります。まず家を建てるつもりなら、それに関わる経費を正直に払わなければなりません。また建てる方としても立派な仕事をしなければなりません。そして晴れて入居の暁には、その中で義しく生活しなければなりません。こういうことこそ大切なことなのです。

時折、自分たちのしたいことをしても、主は恐らくそれを喜んで承認して下さるようなことに関してまでも、勧告を求めに来る人々がいます。おかしなことですが、そういう人々は、自分たちが何かしたいと思ったそのことに心のとがめを感じているのです。たとえそれが正しいことでもそう感じるのです。主は、御自分の与えられた自由には極めて寛大な御方です。私たちは善に従うようになればなるほど霊的にも自立するようになり、自由も独立心も確固たるものとなってきます。主はこう言われました。「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8：31，32)

レーマンとレミュエルは、ニーファイに対して「見よ、われらの父の言葉は何のことだか解らない」と不平を言いました。

ニーファイは「あなたがたは主に尋ねたか」と聞きました。

この答えについて考えてみていただきたいと思います。こう答えたのです。「主に尋ねてはいない。主はこんなことをわれわれに知らせないからである。」

これを聞いたニーファイは、こう言いました。「あなたがたが主の言いつけを守らないのは何故であるか。あなたたちの心をかたくなにして亡びを招くのは何故であるか。主がこれまでに仰せになったことを憶えていないのか。主は『もし汝らその心をかたくなにせず、答えを受くと信じ、固き信仰を持ち、わが誡命を勤勉に守りてわれに願わば必ずこれらのことを汝らに示さるべし』と仰せになった。』(Ⅰニーファイ15：7－11参照)

結びにあたって申し上げたいと思います。私たちが啓示のみたまと力とを失ってしまったら、この教会では、多くのものを失うことになります。皆さんには偉大な力が授けられています。皆さんは、祈りを通して自分で問題を解決することができるのです。他の人々を援助することに忙しい人々のところまでわざわざ出かけて行く必要はないのです。

ところで、もし皆さんが自分の管轄外のことで啓示を受けるようになったら、それは天の秩序に反しており、しかもその啓示は間違ったところから送られていることがわかります。監督に助言を与えるために、あるいは教会の指導者を正すために、啓示を受けることは決してありません。

皆さんの依存心が強まり、祈りと祈りの答えに対する確信が薄くなって、祈ることをちゅうちょするようになったとき、それは皆さんが弱くなるときです。

個人の証はこの教会の力です。従って教会員は皆自分自身の証を持たなければなりません。そうなって初めて、私と同じように、立って、神が生きておられることを、神が私たちの御父であられることを、そして私たちと神とは親子の関係にあることを知っていると言えるようになるのです。私は神が身近におられることを、またいつか神のみ前に行けることを知っています。そしてさらに、私たちがあらゆる力に耳を傾け、それを活用するならば、私たちは確かに、祈りに対する答えを感じ取ることができるでしょう。

この教会は神の教会です。神は生きておられます。イエスはキリストであり、私たちにはこの教会を管理する予言者がいます。私たちは言うに及ばず、この地上に住むあらゆる人々がそれを知ることができます。私はそれを証します。私は神が生きておられることを知っています。この証をイエス・キリストのみ名によって、申し上げます。アーメン。

聞くのが恐ろしいのですか

リンダ・アーチボールド

怖かった。だれにも話したくなかったんです。ほかの人が友だちに福音について話しているのを聞くと簡単そうに思えるのですが、いざ自分が話す段になると、まるで話が違ってきます。バーバラが現代の教会は何の役にも立っていないと言ったときも、ディブが進化論のことを話し出したときも、私の胸は高鳴り、手のひらはじっとりして神経が張りつめ、舌はもちろんのこと体中の筋肉がコチコチになってどうしようもないようでした。

茶やコーヒーを飲まないので、私が末日聖徒であることはだれもが知っていました。私には福音が真実なものという証もありました。それでも、それが口に出せなかったのです。ディブとバーバラが自分の考えを論理づけている間も、私は落着かない気持で沈黙したまま、テレパシーで証が述べられたらよいのにと思っていました。

時が経つうちに、私は罪の意識を感じ始めました。そして、日曜学校教師として立派に働いてその埋合せをしようと弁解がましく考えました。しかしその晩は「すべての教会員は宣教師である」という言葉が耳から離れませんでした。

努力よりも天性だという「生まれついての」宣教師はごくまれです。でも、数少ない「生まれついての」宣教師と「傍観者」との間に、もうひとつのグループが存在します。それは自力で頑張って成功する宣教師、私のように以前恐れていた人たちです。ジェンキンス姉妹、クラーク兄弟、ジェーン、ミシェル、トム、それにベーカー監督のような人たちです。彼らは私が抱いていた恐れを理解し、どうしたらよいかを快く教えてくれました。

ジェンキンス姉妹は言いました。「何事も先立つものは望みよ。立派な宣教師になる前に、宣教師になりたいって思わなくちゃ。自分が人にどんな影響を及ぼせるか、少しも考えない人がいるけれど、あなたはもう最初の一歩を踏み出したじゃない。」そして最後にこう言いました。「あなたには望みがあるでしょ。」

ミシェルは、この世的でもひとりよがりでもなく、自分に自信を持った魅力ある人です。

彼女は私にこう言いました。「前は自分自身がいやになったこともあったわ。太ってたしね。服は時代遅れで、髪はまるで言うことを聞かないし、そんなときに大学の友だちがイメージチェンジをしたらって励ましてくれたの。太りすぎをなくして、すてきな服を作って、でも教会の標準は守ったわよ。そして簡単でちょっとすてきな髪のまとめ方を見つけたの。

人のまねをしようとは思わなかったわ。自分のなりたいようにしただけ。いったん自分が好きになれば、みんなも私を好いてくれるだろうって自信が持てて、それで喜んで福音をみんなに教えられるようになったのよ。」

クラーク兄弟は、福音の教義クラスの教師ですが、みんなに人気があります。彼は、勉強が大切なことを強調しました。「良い宣教師になる秘訣は勉強ですよ。自分自身に福音を説けなければ、ほかの人には説けません。私は自分の疑問を解くために、聖典や教会の本を一生懸命研究しました。他の教会がどんなことを信じているかを調べ、まわりの人たちが何を求めているかを理解するように努めました。勉強を続けたおかげで、私の証は強くなりました。そして多くの経験を通して知識が純然たる信仰に代わりました。こうして伝道は問題ではなくなり、自信が持てるようになると友だちの質問にも答えられるようになったんですよ。」

「だれかに教会のことを話そうと決めたら、何だかんだと言いわけをつけてそれを避けようとしないことよ」と、ジェーンは言いました。「合理化も、あとに引きのばすのもだめ。私はそうしていたんだから。いくら理由をつけても、そのうちに罪悪感を覚えるようになったわ。そんなことで宣教師にはなれなかった。伝道しようと目標を決めて、あとは実行するだけ！」

トムは、ジェーンの言う通りだと言って、さらにこう語りました。「ぼくは『天性の』宣教師じゃないと自分ではわかっていたんだけど、そんなふりをしたんだ。それはちっとも偽善じゃないよ。だっていつも進歩しようと頑張ったんだもの。宣教師のようなつもりになってごらん。そしたら本当に宣教師になれるよ。本当だよ。」

最後に私はベーカー監督に尋ねました。

彼は言いました。「そうだね。私も昔はこわかったよ。今言っていいものだろうか、こういうことを言ったら失礼じゃないだろうか、などといろいろ考えてね。それで伝道の責任を怠けたものだ。そういう問題を解決するたったひとつの方法は、お祈りだったんだよ。今、福音を紹介してよいものかどうか、それに言葉が適当か、いつもみたまの導きを得て判断しなければいけないってわかったんだ。それからは、宗教的な話は避けたほうがいいって霊感を受けることはまずなかったね。」

このように自分で努力して宣教師となった人たちと話をして、あとは私次第でした。

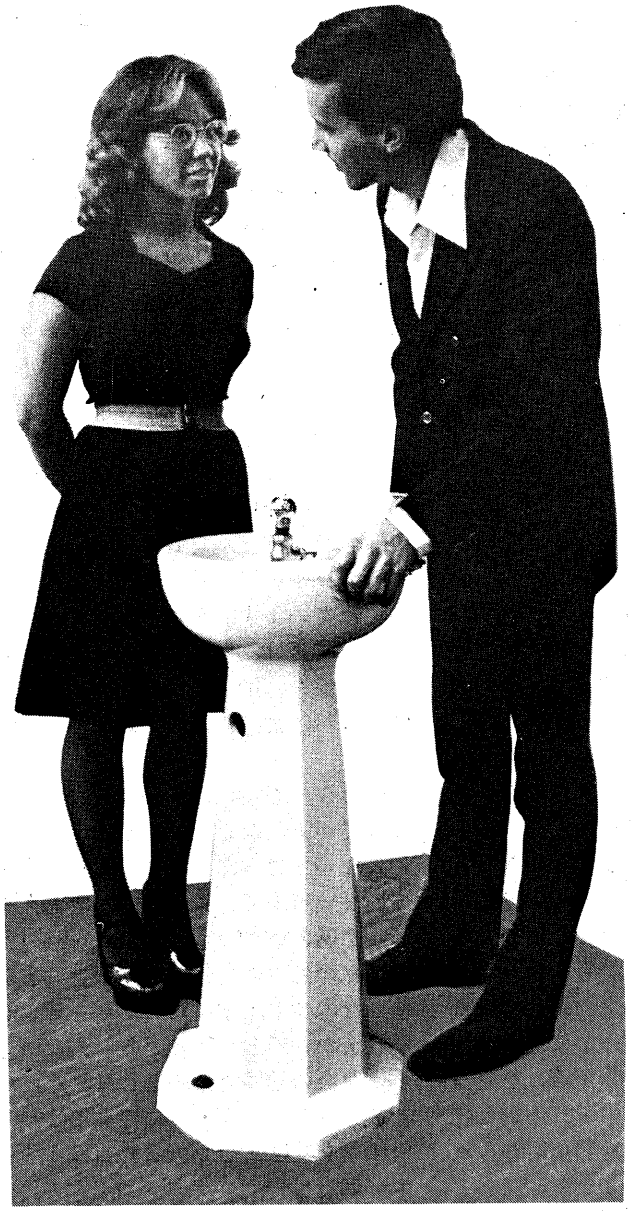
ジェンキンス姉妹の言う通り、私は望みを持っていました。私は姿見の前で自分の姿をじっくり観察し、自分のなりたい姿を決めました。新しい靴を数足買い、古くなった眼鏡を金ぶちのものに換えました。毎日聖典を勉強し始め、まわりの人たちの気持が前よりもよくわかるようになりま

した。目をつむって何回も「できるわ……できるわ……できるわ」と言い、そして祈りました。

やがて、実行の時がやってきました。バーバラがいつものように、既成の宗教の無用性について論じていたのです。準備は万端、勇気を奮い起こすのみでした。胸の高なりや手の汗や、口の乾きはこれまでと変わりありません。でも体にはしゃんと力が入り、舌は自由に動きました。恐れているのか興奮しているのか、自分の気持がわかりませんでした。きっとどちらも反応は同じなのでしょう。

「バーバラ、あなたが既成の宗教に反対なのはわかるわ。でも、もし救い主がある宗派を導いていらっしゃることを知ったら、違ってくるんじゃないかしら。」

「どういうこと？」



「あのね、私が末日聖徒だっていうこと、知っているでしょう。私たち、イエス・キリストが実際に現われて、予言者ジョセフ・スミスに教会を組織させて下さったことを信じているのよ。私たちの教会ができたのはイエス・キリストのおかげなの。」私はバーバラの目をまっすぐ見つめて話を続けました。「そのことを考えたら、もっと知りたいって思わない？」

彼女は首を振りました。「あなたには悪い気持全然持ってないのよ。ただ、本当だって信じられないの。」

「大勢の人がそう考えているわ。新しい考え方よね。でも私は、主が今地上に本当の教会を建てて下さったことを知ってるの。あなただってもっと研究したら、わかるようになるわ。」

「ごめんなさい。私は本当に興味ないの。」

これ以上、何が言えるでしょう。私は困りました。みたまの導きを求めると、答えがありました。今まで出来る限りのことはした、でもまたいつか恐れずに聞いてみなさい、と。

ディブは休暇を取っていたので、私は彼が出てくる日を心待ちにしていました。彼はいつでも喜んで宗教の話をするので、私は何かをしようと決心していました。ところが学校に出てくると、彼はいつになく黙りこんでいたのです。「ふりをすること……。」私は自分に言い聞かせました。「宣教師のつもりで……」と。

私は水飲み場でディブに会いました。また胸が高鳴っています。彼も断わるかしら？　私は深呼吸を一度して切り出しました。

「ディブ、私はあなたに聞きたいと思っていたことがあるの。あなたは宗教に興味があるようだけど、どうして？」

「人生最大の幸福を見つけたいからさ。……宗教がそれを教えているようでね。」

「今までモルモン教徒のことを調べてみたことはある？一番幸せな人たちだって、わかると思うわ。」

「うん、君がモルモン教徒だってこと、知ってるよ。みんなが君みたいだったら、確かにそうだね。」

私は心の中で喜びました。なぜなら、自分が良い模範を示せたからです。

「ディブ、私たちは今地上に予言者がいることを知っているから幸せなのよ。モーセやアブラハムやイザヤと同じような人がいるのよ。予言者の教えに従えばちゃんと救い主に従っていけるの。もっと知りたいって思わない？」2、3秒の沈黙の間、私の胸の鼓動が彼に聞こえるようでした。

「うん」彼は言いました。「知りたいな。本当のこと言うと、君がどんなこと信じているのか、とっても知りたかったんだ。君は何にも話してくれないんで、あきらめるとこだったんだよ。どうして、もっと早く言ってくれなかったんだい？」

（筆者は、主婦、フリーランサーで現在、南アフリカステーキ部ヨハネスブルグ第2ワード部若い女性の会長および扶助協会社会教師を務めている。）

氷の穴での バプテスマ

エイナル・ノルドランデル
スウェーデン、エーテボリ

1904年の寒い冬の日のこと、ふたりのモルモンの宣教師が、森を抜けて私のの祖母クリスチナ・ボーリンの家へやってきました。祖母の家のあかりを見て、「あそこに行こう」と決めたのです。

宣教師が来たときは夜もだいぶ更けていました。狭い小屋に大勢の子供がいるのを見て、彼らはきっとためらっ、たことでしょう。でも私の祖母は彼らを招き入れ、できる限りのもてなしをしました。宣教師は一晩明かすと、数冊のパンフレットを置いて出かけました。祖母はそのパンフレットを丹念に読みました。

1年が過ぎて、1905年の1月にまたやってきました。その日、彼らは祖母に、置いて行ったパンフレットについてどう思うか尋ねました。そこで祖母は、どれもこれも本当だから、ぜひバプテスマを受けたいと答えました。宣教師たちは、「でもこの季節には水のある所がありません」と言いました。

すると祖母は、こう言ったのです。「近くにちょうど湖があります。まき小屋に斧とのこぎりがありますから、氷を割ってバプテスマができるでしょう。」

長老たちは苦労して厚い氷を割り、やっとのことで、祖母のバプテスマができるくらいの穴をあけました。水がいかに冷たかろうと、とにかく祖母は教会が真実だと知ったからには、バプテスマを一刻も延ばしたくなかったのです。

私の祖母が福音を受け入れたおかげで、間接的にではありましたが、私も教会のことを知ることができたのでした。

「いつでも 5分はある」

レカ・オルセン
デンマーク、コペンハーゲン

「5分だけ、時間をさいていただけませんか。」この言葉には何か感じるものがありました。その宣教師たちと話をする時間はありませんでした。でも、前に友だちが言っていた言葉を思い出したのです。「友のために取れる時間があれば、宗教について話す人のために聞く時間をお取りなさい。いつでも5分はあるものよ。」それで、私は彼らを家に入れたのです。私は宣教師の話に興味をおぼえ、2回目の話の後、彼らの言葉は本当かもしれないという気持が心の中にふくれあがってきました。でも、夫は何ひとつ受けつけようとしませんでした。4回か5回、宣教師から話を聞いた頃、夫はひどく腹を立て、訪問を断わらなければ私と子供たちを置いて出て行くとおどしました。

その夏、私たちはオーストリアで休暇を過ごしました。私は宗教のことは忘れようと努めました。でもとても複雑な気持で、家に帰ってからとうとう夫に、宣教師の話が真実かどうか知るために一生懸命祈ってみると話しました。すると夫は、「それはいい。そうすれば、君はもうそんな話をしなくなるだろうからね」と言いました。

私は3日間、知恵の言葉を守って主に祈りました。けれども自分の祈りが空しい言葉のように思われました。それでも挫けずに続けたところ、やっと、キリストを信じて真心からの祈りを捧げることができました。そして、立ち上がったときに、もしこれで答えが得られなければ、もう祈りはやめようと思いました。ドアのベルが鳴ったのは、それから1時間ほどしたときのことです。ドアを開けると、そこには宣教師が立っていました。

彼らが居間に入って来ると、私は不思議な気持に打たれました。それは頭から発して全身を包みました。こうして私は、祈りが答えられたことを知ったのです。私は寝室に入ると、喜びの涙を流し、主に感謝の祈りを捧げました。居間に戻ったとき、長老たちが次のように話してくれました。彼らはその日ひとりの婦人を教えていましたが、急に彼女に何を言えばよいかわからなくなってしまいました。そのようなことは初めての経験だったそうです。そこで、彼らは次の約束をして彼女と別れました。そしてその次の約束の場所へ行く途中、私のアパートの前を通りかかると、私の幼い息子が彼らを見つけてかけより、私の所へ来たのかと聞きました。彼らは私に訪問を断わられていたので、どうしようかと相談しました。するとひとりが、訪問するようにみたまが強く勧めると言いました。私がバプテスマを受けたのは、それから10日後のことです。

この話には素晴らしい続きがあります。このとき、ひとりの教会幹部がデンマークを訪問しておられて、宣教師は私をその幹部に会わせて下さいました。その方は、もし私が教会指導者の勧告に従うなら、間もなく夫もバプテスマを受けるとおっしゃるのです。私は、「そんなことはない。夫は教会に入るはずがない」と思いました。その晩、私は支部長から教会をどう思いますかと聞かれて、「この教会には愛があふれています」と返事しました。すると支部長は、「あなたがここで感じている愛を、御主人の所へ持ち帰らなければいけませんよ」とおっしゃいました。

私は少し不愉快に思いました。夫を愛していましたし、そのような忠告はいらないと思ったのです。でも、家までの長い車中で、夫に教会のことをやさしく話さなければと思い直しました。その私の態度の変化が夫の好奇心をそそったのです。子供たちが目を輝かせて教会から帰ってきたとき、夫はいよいよ教会の勉強を始めました。それから3ヵ月して、夫と8歳の息子はバプテスマを受けました。その日は本当に生涯最良の日でした。

「もしもあなたが真心から努めるならば」

七十人最高評議員会会員
ポール・H・ダン

私は3歳の年から、プロ野球選手になる準備を始め、以来ずっとそのことばかり考え続けていた。それが問題だった。学校や教会は野球選手になることとはまったく無縁だと考えていたのである。

12年間の学校生活の間、私は一度として、勉強の本を家へ持ち帰ることがなかった。それを誇る気持はない。今はそのことを悔やんでいる。私は悔い改めようと努め、現在残りの一生をかけて、若い頃の愚かな論法が生んだ空白を埋め合わせようとしている。私は代数や英語について、「大選手になるのに学校はどんな価値があるのか。代数や英語ができたってできなくたって、カーブは投げられるんだ」と考えていた。家に帰ってよく言ったものである。「僕の将来は大丈夫。だれよりも速い球が投げられるし、走るのは速いし、打球は遠くへ飛ぶし、だからとやかく言わないで」と。私は今、その考えがどんなに間違っていたかを知っている。

日曜日に教会へ行くことは、私にとって屈辱に思われた。立派な野球選手になるのに教会が一体どんな役に立つのか、と。

それが私の考え方だった。立派な野球選手や弁護士や医師になることは大事ではないと言っているのではない。大事である。この世の救いにそれは必要である。しかし、この世に送られた私たちにとって最も大切なことはそれではない。本当に重要なのは永遠に関わる事柄であり、そのことに早く気づいて行動を起こせる人は、賢明な知恵ある人である。

私が高校を卒業したのは18歳の年だった。私はそれまでの15年間を自分の好きなように過ごしてきた。その年、大リーグの8つのチームからスカウトが来ていた。そして私は、両親の許可を得てひとつのチームと契約した。とても高い給料だった。十代の少年にとって、それがどんなに胸の躍ることかおわかりだろうか。どう言ったものか、口では表わせない。私はその当時首位のチームに所属を決め、ユニフォームに真新しい背番号をつけてダッグアウトの住人となったのである。それがどんな感激か、おわかりだろうか。

しかし3歳のときに、第2次世界大戦の予測はしていなかった。世界大戦は計画外のことだった。それについては全然知らなかったし、18歳の誕生日が来たとたんに1通の手紙を受け取り、以後3年間兵役のために野球生活が中断されるなどとは思ってもみなかった。

私は大急ぎで基礎訓練を受けさせられたが、それはつらい毎日だった。本来受けているはずの基礎さえなかった私は、そのときに、それまで目もくれなかった学校教育や訓練といった別のことの価値を幾分なりとも理解したのである。およそ訓練を要する仕事は何もかも不適格だったので、私は割の悪い仕事を全部させられた。

それから11ヵ月ほど後、私は太平洋の輸送船に乗った。私たちは輸送船団の1隻に乗って、最初の戦場をめざし、ある島に向かったのである。

初めの2週間、陸軍、海軍一緒に毎日夕方5時から合同礼拝が行なわれた。ユダヤ教徒もカトリック教徒も異教徒も末日聖徒も、一緒に歌を歌った。そ

れから従軍牧師が4、5分話をした。そのとき私たちはただ座って、お互いに故郷やガールフレンドや年頃の青年にとって関心のあるいろいろなことを雑談し、そして解散した。毎月5時から1時間ほど礼拝があった。3千人もいる中で、毎日この小さな集会に出ていたのは35人から40人位だった。わずか35人か40人である。しかし、あなたの学校やステーキ部、ワード部、あるいは周囲の社会を見ても、そんなものではないだろうか。

船上最後の日に、最後の礼拝が行なわれた。その日は正規の集会所に人が入りきれなかったので、夕方の礼拝は船首の甲板で開かれた。私はそこで、人間というものについてそれまで知らなかった実に興味深いことを学んだのである。

1944年7月21日に何が起きたか、御存知だろうか。3千人が礼拝に集まったのである。3千人が人生のもっと価値あるものに大きな関心を抱くようになったのである。危険が眼前に迫るとき、いかに人々が宗教に目を向けるかを見ていただきたい。危機のときだけなのだが、彼らは商人であれ犯罪人であれ野球選手であれ、より高い所からの助けが必要なことを感じたのである。

ところで、あの素晴らしいプロテスタントの従軍牧師が行なった礼拝は私にとって決して忘れられないものであった。彼は正直で誠実で、淡々と話をした。私たちは外の甲板に座り、3千人の声が「主よわれと共にとどまりたまえ」と開会の歌を歌った。おそらく生まれて初めての人が多かったと思うが、3千人の兵士全員が思いを込めてこの歌を合唱したのである。この光景を想像いただけるだろうか。別の船でも同じようなことが起きているのが耳に聞こえるだろう。次に短い開会の祈りがあり、牧師の顔は今までになく真剣そのものであった。

彼はこう言った。「皆さん、私は今晩、皆さんに事実を隠そうとするつもりはありません。皆さんはこれまでの1年間、明日のために訓練を受けてきたのです。皆さんは自分の任務をよく承知しているでしょう。過去の軍の統計によると、明朝の攻撃では大勢の人が命を落とすと思われます。この島を奪回するには代償が必要なのです。」そしてこう語った。「もし記録が正確ならば、明日の朝8時以前に、皆さんの半数は戦死します。皆さん、私の言いたいのは、あなた方の半数が明朝8時には造り主のみ前に立つということです。その備えはできていますか。」

さて、若い皆さん、あなた方ならどう返事するだろうか。私は当時18歳だった。もしだれかが、「明朝8時に、あなたは救い主の前に立って、自分の人生や心の状態や行ないについて報告をしなければならない」と言われたら、どのように感じるだろうか。私はその場にすわって、自分の栄光の野球生活を遂に思い返していた。野球に明け暮れた日々が何と無意味に思えたことか、皆さんにおわかりだろうか。契約や名声や大金は、人生の本質を成すものについて考えるときに、何と無価値であろうか。

私は初めて、宗教の持つ力について何かを知りたいと思った。神は本当に生きておられるのだろうか。私はなぜ戦場にいるのだろうか。見も知らぬ人をどうして殺さなければならないのか。そのような疑問が次から次へと心に湧き始めた。なぜ、なぜ、私たちが今ここで問うてみるべきものは、そのような疑問である。私たちが現在この世で行なっていることには、一体どのような意味があるのだろうか。

さて、あの輸送船上の礼拝は終わった。その翌朝、汽笛を合図に私たちは上陸の準備を始めた。あの小さなサンゴ礁に下り立ったときの気持は、今でも覚えている。潮が満ちていた。私は胸まですっかり水につかり、銃を上にかかげて岸にたどりついた。訓練を共にし、なじみになっていた友人の屍を押し分けながら。疑問に思わない方がおかしい。あの19歳の立派な若者は、なぜ水中にうつぶしているのか。どうしてなのかと。

私は父と一緒にひざまずいて、父が心の思いを腹蔵なく天父に打ちあけるのを何度も聞いたことがある。私の父は知性に富んだ有能な実業家で、地域社会でも尊敬され、よく相談を受ける立派な指導者だった。しかしそれでもたびたび謙遜にひざまずいては、「主よ、お教え下さい」と祈っていた。私は、父が目に涙して立ち上がり、天を仰いで感謝を捧げるのを何度もこの目で見た。

グアム島に上陸したあのときまで、私は神を知らなかった。あの運命の日、岸に向かいながら私の知ったひとつのことは、父は神が生きておられることを知っている、父は答えを受けているということだった。そしてざんごう掘りをしながら私の知ったことは、自分にも父のしたことができるということだった。私は父の指導と教えを永遠に感謝するだろう。私は狙撃も恐れずにヘルメットを脱ぎ、頭を垂れてひざまずいた。そして天父にただ簡単にこう尋ねた。あなたは生きておられますか。実在の御方ですか。イエス・キリストは本当に救い主ですか。ジョセフ・スミスは教会の予言者でしたか。私はこれまでずっとそのことを聞かされましたが、まだ理解できずにいます。すると答があった。快い確信の気持が。聖霊が私の霊に、静かな声で「その通り」と告げて下さった。あの7月9日に胸に感じた気持は非常に明白であった。そのために、自分の穴から飛び出して戦場を横切っても傷ひとつ負わないだろうとさえ思った。平安と安心感はそのように大きかった。

証が生まれた。「誠心誠意で」（モロナイ10：4）尋ねたからである。私はそれまでに、家族や教会の圧力を感じ、それこそ何千回となく祈っていた。しかしその日、私は本当に知りたいと思った。「主よ、そこにおられますか。お話し下さいますか。」そして、主は私に語られた。その日以来、私は主に自分の命を託してきた。そして、この教会が真実であり、ジョセフ・スミスがイエス・キリストの福音を回復するために召され、聖任されたことについて、たびたび確証を得てきたのである。

私はただひとつの証を基礎に、それを受け入れてきたのではない。それは大方の人々も同様だと思う。私は復員してから軍人保険を使って大学に通っ

た。プロテスタントの神学校へ入って牧師たちと一緒に卒業したが、それは、聖書の教えから見て、モルモン教会が世の試しに耐えられるかどうかを知りたかったからである。私は、モロナイの告げたように神に尋ねて証を得たばかりか、西海岸屈指の神学校で何年もの間証を試されたことをも報告できるので非常にうれしい。この福音は真実である。兄弟姉妹たち私の話していることが正しいかどうかを知るために、時間と精力を捧げ、確信をもって祈っていただきたい。

私は出征する前に、父の勧めで祝福師の祝福を受けていた。御存知のように、それは私たちが福音の原則を取り入れて将来の生活を形成していけるように、啓示されることである。私はその祝福師の祝福で、数節にわたって、自分が老齢まで生き、妻と子供たちを持ち、教会で大きな経験をすると言われた。そしてその結びとして、よく言われることだが、このような条件がつけられた。「もしもあなたが真心から努めるなら。」この通り、条件付きである。「ポール、もしもあなたが真心から努めるならば、これらのことは実現するでしょう」と。そして一文には、戦闘時に神の介在があると言われた。

ところでサンフランシスコからあの運命の船旅に出た私の部隊の総勢1千人で、2年半後に無事帰還したのはわずか6人だった。そしてその6人のうち5人は、再三ならず重傷を負っていた。命を落として当然だと思われるような事件はそれこそ何千回となくあったが、私は何かのわけあって命を失わずに来た。

例をあげれば、あるとき私の分隊に、敵の位置と弾薬庫と補給地をさぐってくる任務が課せられた。丸一昼夜を費やして、翌朝帰る予定だった。私たちは敵の背後にまわり、敵の位置と弾薬庫の補給地を調べて地図に書き込み、引き返した。ところが、味方の前戦が変わっていて、前日の場所はすでに敵に占拠されていたのである。私たちは丘をまわって谷に入った。ところが、味方の陣地だとばかり思っていたその丘も占拠されていた。ふたつの丘は共に敵の手に落ち、私たちはその谷で敵の間にはさまれてしまった。そこで私たちは砲撃跡の深いくぼみに身をひそめた。

私たちが自分たちの置かれた状況に気づいたのは午後も遅くのことである。その地点は扇形戦線の中にあり、日暮れまでにそこを脱出しないと敵が進んで来ることはわかっていた。私たち11人は計画を練った。味方の前線まではまだ400メートルほどあった。私たちの苦境を見た味方の叫び声も聞こえたが、すでに遅すぎた。私たちは疾走を試みるつもりで、計画が決まり次第それを知らせると応答した。それから穴の中で、自分たちの状態を考え、夕暮れに一団となって脱出することにした。何人かが死ぬことはわかっていたが、ともかくだれかが助かるためにはそれしか方法がなかった。長い瞑想の時間だった。本当に長かった。長い間座ったまま待った。

決行は6時15分に決まった。敵の目につきにくく、それでいて走る道がわかる程度の暗さだからである。私たちは味方に充分な援護射撃を頼んだ。銃や弾薬袋や手りゅう弾など、重い物は全部敵が使えないように分解して捨てた。それから、座って思いにふけり、あるいは話をしたりした。また私はひざまずいて祈るように頼まれた。そのとき私たちは、生き残った者が死んだ者の家族の助けになることを約束し合った。

私は祝福師の祝福を肌身離さず持っていたが、6時5分にその祝福文を読み返した。祝福文を開いて、もう一度丹念に読んだ。そこにはこうあった。「ポール、もしもあなたが真心から努めるならば、生き抜いてある事柄が実現するのを目にするでしょう」と。置かれた状況から脱出するのは人にできることではなかった。私がお話しようとすることはその場にいなければわかっていただけないと思う。

さて、6時15分が来た。私たちは握手をした。皆さんは、11人の男があのように走り出した姿を恐らく見たことがないだろう。3、4人は飛び出した途端に機関銃でやられた。親友のひとりは、体がやっとつながっているくらいに機関銃の弾を撃ちこまれ、助けようとして立ち止まったときには息が絶えていて、私はそのまま走り出した。雨が強く降っていたのでぬかってすべりやすく、ひどく寒かった。一歩踏み出すたびに足を取られて転んでしまいそうだった。私はジグザグに走った。うしろの泥が体にはね上げてくるので、敵は機関銃で私を狙っていたのだと思う。私が方向を変えると、またも弾丸が追ってきた。私は力の限り走った。そのときにはすでにみんなはばらばらに走っていた。穴から出て50メートルも走らないうちに、狙撃兵が私にねらいを定め、最初の一発が右のかかとにあたった。弾は体に当たらず、戦闘靴をはね飛ばして、瞬間私ははだしになった。靴はきりきり舞って私はひざを突いた。そしてひざを突いた私の背中越しに機関銃が掃射されたが、体には当たらず、ベルトと水筒と弾薬袋を背中からはね飛ばした。立ち上がって走り出すと、また数発の弾丸がちょうどヘルメットの後部に当たった。そして弾は跳ね返ると頭上を越えていき、ヘルメットは真二つに割れた。しかし私には当たらなかった。それから私はまた駆け出したが、またもや弾が服の肩のたるんだ部分に当たった。そのために服を取らなくてもシャツの袖が脱げる格好となった。私はそれからひと飛びして味方の陣地に倒れ込み、これ以上汚ない者はいないといった泥まみれの軍曹の腕に抱きとめられた。一部始終を見ていた彼は、「ポール、実に運のいい奴だ」と言った。「ついて来いよ」と言うので、腹ばいであとについて行くと、助かったのは私ひとりで、あとの10人は皆初めの100メートルまで行かずに死んでいた。

運が良かったのだろうか。そう言いたければそれでもいい。そのとき、私は確証に確証を加えられていた。2年間の戦闘中に、このような出来事は数えきれないほどあった。私がこの話をするわけは、ただ教会の内外すべての若者は自分の心とこの世における自分の立場を真剣に考える必要があると感じているからである。今は準備のできるときなのである。

四福音書の対観表

四福音書はそれぞれ、その記述順序また内容において必ずしも一致しているとは言えない。しかし、それらを総合して見た場合、イエス・キリストのみ業についての完全かつ正確な姿が浮きぼりにされるのである。本稿では、救い主の生涯における主要な出来事を取り上げ、それが起こった場所と、福音書の参照箇所を表わすことにした。このように相互に関連づけることを普通、対観と呼んでいる。すべての出来事に対して場所がわかっているわけではない。しかし、一連の出来事や場所について考察するときに、主の生涯に関してさらに理解を深めることができるのである。

本稿の対観とキリストの生涯の区分は、J・ルーベン・クラーク・ジュニア著 *Our Lord of the Gospels*「福音書に見られる私たちの主」の対観表によった。本年度(1976-77) 日曜学校福音の教義クラスのレッスンも、前述の著書に基づいて作成されている。また読書課程は、クラーク副管長の分類によるキリストの生涯の時期に従って準備されたものである。(各時期に対応するレッスンの章も明示した。)「四福音書」p. 1、19、29、47、55、79、89、99参照。本稿に取り上げた出来事はクラーク副管長の分類によるものであり、救い主の生涯についてさらに詳細な研究をする上で有益であろう。この対観にあたって、クラーク副管長は次のように書いている。

「著者は対観にあたって、福音書の対観を研究している学者諸氏の意見を伺い、一般的とみなされている年代順に分類を試みた。従って、救い主の生涯における出来事の順序を必ずしも正確に表わしてはいないかもしれない。しかし、ほぼ正しいものと思われる。なお、研究家によっては、本書とは異なった年代順を用いている人もいる。

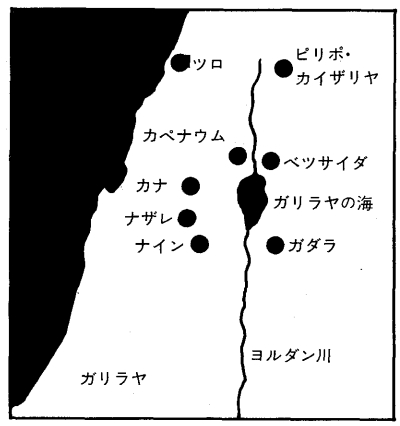
いずれにしろ、出来事の順序はそれほど重要な意味を持たない。大切なのは、イエスが何を語り、何を行ない、どのような教えと教義を説かれたかということである。」(*Our Lord of the Gospels*「福音書に見られる私たちの主」p. vi)

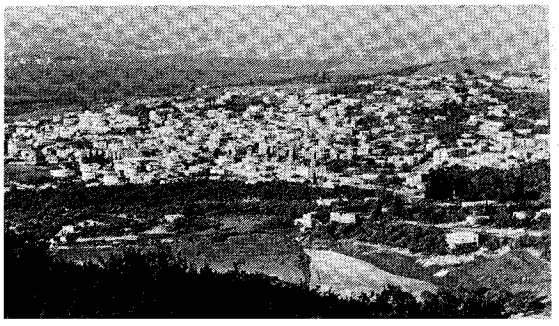
第1の時期：イエスと降臨の予言から、ヨハネの伝道まで
(「四福音書」第6－8課)

出来事	場所	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
イエスの先在					1：1－18
ザカリヤへのみ告げ	エルサレム			1：5－20	
引きこもって生活するエリサベツ	ユダヤ			1：24－25	
マリヤへのみ告げ	ナザレ			1：26－38	
マリヤのエリサベツ訪問	ユダヤ			1：39－56	
ヨセフ、示現を受ける	ナザレ	1：18－25			
ヨハネの誕生	ユダヤ			1：57－80	
皇帝アウグストの勅令				2：1－5	
イエスの誕生	ベツレヘム			2：6－7	
キリストの系図		1：1－17		3：23－38	
羊飼いの来訪	ベツレヘム			2：8－20	
割礼	ベツレヘム			2：21	
神殿へ連れて行かれる	エルサレム			2：22－38	
ナザレへ帰る	ナザレ			2：39	
博士たちの来訪	ベツレヘム又はエルサレム	2：1－12			
エジプトに逃れる	エジプト	2：13－15			
幼児の殺戮(さつりく)	ベツレヘム	2：16－18			
エジプトから帰る	ナザレ	2：19－25		2：40	
神殿を訪れる	エルサレム			2：41－50	
ナザレに住む	ナザレ			2：51－52	

第2の時期：ヨハネの伝道から、イエスの伝道時代における最初の過越の祭まで
(「四福音書」第9－13課)

出来事	場所	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
バプテスマのヨハネの宣教					
ヨハネの出現	ユダヤ			3：1－2	
ヨハネの紹介と教え	ユダヤ	3：1－6	1：1－6	3：3－6	
ヨハネの宣教		3：7－12		3：7－14	
キリストの訪れを告げる		3：11－12	1：7－8	3：15－17	
ヨハネ、イエスにバプテスマを施す	ベタニヤ	3：13－17	1：9－11	3：21－22	
試み	ユダヤ	4：1－11	1：12－13	4：1－13	
ヨハネ、自分はキリストでないことを宣言する	ベタニヤ				1：19－28
ヨハネ、イエスがキリストであることを証する					1：29－34
アンデレとシモン、イエスに会う					1：35－42
ピリポとナタナエル、イエスに会う					1：43－51
最初の奇跡――カナの婚礼	カナ				2：1－11
イエス、カペナウムへ行く	カペナウム				2：12





カナの町―イエスが最初の奇跡を現わされたところ

第3の時期：最初の過越の祭からガリラヤへ帰るまでの、初期のユダヤにおける伝道
（「四福音書」第14－15課）

出来事	場所	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
最初の過越の祭――最初の宮清め	エルサレム				2:13-25
ニコデモの訪れを受ける	エルサレム				3:1-21
ユダヤへ帰る	ユダヤ				3:22
ヨハネ、弟子たちに証を述べる	ユダヤ				3:23-36
ヘロデ、ヨハネを投獄する	マケルス	14:3-5	6:17-20	3:19-20	
ユダヤを出て、ガリラヤへ向かう	ユダヤ	4:12	1:14	4:14	4:1-3
サマリヤの女を教える	スカル				4:4-42
ガリラヤへ行く	ガリラヤ				4:43-44

◇――――◇――――◇――――◇

――わが証――

生と死

熊本支部
中村良昭
（心臓外科医）

私は熊本の中村兄弟です。家族は妻と中学2年になる女の子、それに小学校5年の男の子の4人です。私たちが最初に宣教師からレッスンを受けましたのは、1971年4月でした。私と妻と長女の3人がその年の7月にバプテスマを受けました。長男はまだ7歳でしたので、あくる年の5月にバプテスマを受けました。私たちがバプテスマを受けてから、まず特別な事情のない限り家族4人そろって、日曜日にはいつもすべての集会に参加しています。そのほか姉妹は扶助協会に、子供たちはプライマリーに集っています。

私たちは今までに多くの素晴らしい指導者に会い、また神殿に行くこともでき、たくさんの証を得ることができました。この12月の熊本支部のホームティーチングにおけるチャレンジは「あなたたちは今年1年間、主からどのような祝福を受けましたか。数えてみてください」でした。チャレンジを受けるまでもなく私たちの家族は多くの証を得ることができました。11月の末には長男が神権予行プログラムを受けることができました。来年の5月に、神権者になるのです。彼は今、将来伝道に出るために、貯金を始めていますし、また伝道に出たときにオルガンを弾く必要もありますので、ピアノの練習をしています。家庭の夕べでは書記をつとめ、時々司会もします。家族4人がいつも一致して楽しい雰囲気のもとに、家庭の夕べを開き、教会の福音を学び、共に実行する機会があることを心から感謝しています。きょうは、私の仕事に関連した証を述べたいと思います。

私は熊本の国立病院に勤めています。専門は心臓と血管の外科です。心臓と血管の病気にとってタバコは最も悪いもののひとつです。東京女子医大に榊原という心臓外科の先生がいらっしゃいます。日本の心臓外科の権威です。この方がある本の中で、「私もタバコをやめました。」と書いておられました。心臓や血管の病気の患者さんに対して、私たちはいつもまず、タバコをやめることを強調します。榊原先生も同じく、患者さんに対してタバコをやめることを強調しておられましたが、やめるようにと言う医者本人がタバコを吸っていて、どうして患者さんに説得ができるだろうか、ということで自分もタバコをやめたといっておられます。素晴らしい先生です。私も自分自身が酒もタバコも飲みませんので、本当に心からタバコをやめることを患者さんに説得することができます。

少し以前のことですが、ある福音を勉強した家族から、灌油の儀式について医学的に説明するように求められたことがあります。灌油の儀式、これは信仰に基づく儀式です。この信仰の問題を医学的に解説せよということ事態、もうおかしいと思いますが、まだ福音をよくご存知ない時点にお

いては、そこの区別が無理かと思います。医者の立場から私はどう思うかということを質問されました。そのような疑問を持つ根底は恐らく、このように医学の進んだ時代にそういうまじないのような、迷信のようなことを、どのように医者が考えているのかという意味ではないかと思います。確かに今の医学は進みました。私の専門で心臓を扱う場合に心臓を止めねばなりません。心臓を止めるのも動すのも私たちは自由に行なうことができます。心臓を2時間止めておいて、またもとに戻すことは、いとも簡単なことです。医学は確かに進んだと言えば進んでまいりました。

しかし、一歩踏み込んでみると、まだ何にもわかっていないということが言えるのです。例えば、ガンにしても世界中の学者が莫大な金をかけてガンを究明していますが、体の中にガンを持っているときに、その人の血をとって、あるいは尿を取って、あるいはツベルクリンテストのように皮膚にテストをして、それでその人にどんなガンができているのか、そのガンはどの程度の大きさなのか、どの程度に進んでいるのか、そういうことすら、まだわかっていません。もっと身近なことで風邪にしてもそうです。風邪の薬、一服で直るような素晴らしい風邪の薬というのはまだありません。一歩踏み込んでみると、全くもう歯が立たないことばかりです。あまりにも今の医学が進んでいると言う錯覚のもとに信用すると、やはり医学がすべてのものを解決するように考えがちです。また、病気というものは医者が直すのではありません。病気は本人が直すものです。ですから、その人が病気に対してどのような心がけを持っているかによって直る病気も直りませんし、重い病気も直すことができます。私たちが心からイエス・キリストを信じ、神様を信じ、この灌油の儀式を信じて、強い信仰のもとにこの儀式を受けるときに、また儀式を行なう人が、ふさわしい権能を持って正しい儀式を行なうときには、本当にそこに灌油の儀式の意義が現われると証いたします。昔は、イエス・キリスト様が、また、そのイエス・キリストの弟子であった十二使徒が癒しの奇跡を多く行ないました。そのような昔の時代には、本当に皆が、素朴な信仰を持っていたと思います。

今、この末日の時代に人々の心というものは多くの情報——昔はラジオもなかった。テレビもなかった。今は、ラジオもあれば、テレビもある——いろんな情報が入ってきて、素朴な心を失ってしまっています。なまじっかな知識が、人間の心を曇った心をもって神さまを信じあるいは頼るというとき、そういう状態のときに、癒しの奇跡は現われないと思います。心から信じて受ける灌油の儀式であるならば、私は本当に素晴らしい祝福が得られると信じています。

私はよく「死にたい」という患者さんに出会います。血管がつまって指が腐り、そのために最初に指を切り落としそれから足首を、今度はひざの下を切り落とす場合があります。ダルマのように、だんだん足を、あるいは手を切っていかねばならないような病気の患者さんがいます。この患者さんがあるとき、本当に「わしゃ、死にたい」と言いました。よく話を聞いてみますと、そばにいる人が少しも自分の話を聞いてくれない。食事も親切にしてくれない、ということなのです。私は「そんなことなら、もう食事もせんでいいじゃないですか」と言いました。本当に死にたいんだったら、食事のことなんか問題にないはずだと思います。また、ある患者さんは、「足を切るくらいなら死んだ方がいい」と言ってなかなか、足を切ることを賛成しませんでした。家族の説得でやっと足を切り落としましたが、切り落としてみますと、「ああ、こんなことなら早く手術すれば良かった」ということを言いました。この世に生を受けたという意義をよく理解しておれば、不用意に「死にたい」という言葉は出ないと思います。でも、福音を知らない人たち、この世に生を受けた意義をよく理解できない人たちは、えてして「死にたい」という言葉を安易に使うように思います。

心臓の手術をするときには、患者さんは自分の意志と反して死というものに直面することがあります。心臓の手術は長時間かかりますので、いつも家族の方には、手術の危険性を説得します。手術の朝は特に「今から手術をします。私たちは全力を尽くしてこの手術をします。でも万が一ということがあるかもしれません。これは人間のなすことですからそのことを一応は考えておいて下さい。長時間、病室で待っていただく間、皆さんは神さまにお祈りしておいていただきたい」ということをよく言います。無論、私自身手術の前にはお祈りをしますし、手術が終わってからは無事に手術がすんだ感謝のお祈りをします。

熊本城をつくったのは加藤清政です。熊本城の横には加藤清政を祭った加藤神社というのがあります。私の勤めています国立病院は熊本城のすぐ横ですから、その患者さんの家族が加藤神社にお詣りしてその子供、あるいは家族の手術の成功を祈ることがあるかもしれません。でも果たして、加藤清政にお祈りをして手術の成功を祈るということで皆さん満足できるでしょうか。私たちは神様に祈ると言ったときに、どんな神様に祈ればいいのでしょうか。そしてその神様にどのように祈ればいいのでしょうか。そういう方法を本当に知っているならば、もうワラをもつかむ思いのとき、本当に何とかして助けて欲しいと願うときに、祈りがどんなにか意義深いものであろうかと思います。また、これは新聞に出ていましたが、日本の医者の意識調査の中で、医者が神さまというものを信じるのは大体日本では60%、アメリカでは80%ということです。確かに人が生まれ、人が死ぬという厳粛な事実、しかも、人間の手では、医者の手ではどうしようもないような事実に数多く直面していますと、神さまというものの存在、少なくとも私たちの目に見えぬ、私たちの知識の及ばぬところで働いている

偉大な力というものを信ぜずにはおられないと思います。それを日本では6割の医者が、神様としてその力の存在を認識しているのだと思います。

私たちが生きた神様そして骨肉の体を持った神様ということを知っているならば、どんなにか祈りというものが現実化されていくことだろうと思います。

また、私の勤めています国立病院はベッド数550ですが、大体3日にふたりの割合で病人が亡くなっていきます。国立病院とか大学病院は最終病院ですから、開業のお医者さんとか、町立病院から送られてくる手に負えない重症患者が多く、亡くなる率も高いのです。そういう死に直面した患者さんを診ておりますときに、私たちはしみじみと思います。人間が死の恐怖におびえているときの姿、何とかして生き延びたいという、その死と対決した人の姿というものには、本当にかわいそうな面があります。もしこの人が福音を知っていたならば、こんなにまで苦しまなくてもすむんじゃないかということを私はよく感じます。福音を通して自分がこの世に来た意義をよく理解でき、来世において本当に神様の道を歩むならば、昇栄し神様のみもとに行けるという喜びを知っているならば、こんなにまで苦しまなくてもすむということをよく感じます。教義と聖約の42章46節、47節には、「われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。そは死は彼らにとりて甘ければなり」とあります。主にあって死ぬ者にとって死は甘いのです。「また、われにあらずして死ぬる者は禍なるかな。そは死は彼らにとりて苦ければなり」とも記されています。神様の道を歩まなかった人にとっての死は、苦いものですから、本当に福音を知っている人にとっては死の味は甘い、ということが言えると思います。また、アルマの40章には、次のように書かれています。「さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても、この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神のところへ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。それから義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息む。次に、悪人の霊は少しも主の『みたま』とかかわりがなく善いことよりも悪いことを好んだので悪魔が入ってそれらの者を支配していた。それであるから、これらの者の霊はそとの暗やみの有様に追い出され、泣き悲しんで歯がみをするのである。これはかれらが自分で罪悪を犯し、悪魔の意志に負けてその奴隷になった結果である。これがすなわち悪人の霊の有様で、かれらは暗やみの中で大そう恐れおののきながら自分たちに下る火のような神の怒りを待っている。かれらは復活の時までこのような境涯に止まらなくてはならない。しかしこれと同時に義人はパラダイスに在る。」

このように神さまの道を歩んだ義しい人はパラダイスに行くことができ、神様の道を歩まずに悪魔の意志に負けた人、あるいは自分で罪悪を犯した人は暗やみの中に行くということが言われています。

私たちがこの正しい道を歩むということを知ることができるならば、本当にパラダイスに行くことができるのです。そしてこれはヨハネによる福音書の6章になりますが、「よくよくあなたがたに言っておく。信じる者には永遠の命がある」とあります。神様は、救いの計画で私たちに永遠の生命を与えると約束しておられます。私たちは本当に永遠の生命を得、昇栄することができるのです。「私は命のパンである。あなた方の先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べるものは、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である。」「そこでイエスは彼らに言われた、『よくよく言っておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない、天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである。』」「わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。」

天にいらっしゃる神様は、御子イエス・キリストをこの世に遣わし、そして終りの日にすべての人々が永遠の生命を得ることができるように、御子イエス・キリストを信じる者がことごとく永遠の生命を得ることができるように願っておられるのです。

私たちは生身の人間ですから、死というものに直面します。ただただ死というものを恐れるのではなくて、このように素晴らしい救いの計画があり、正しい道を歩んだ人たちにとって死は甘いものとなり、死後の霊はパラダイスへ行くことができ、神様は私たちが永遠の生命への道を進むのを待ち望んでいらっしゃるということを、よく理解できるならば、私たちは、日々喜びを持って生活することができると思います。私はこのように病いにあって床に伏している人たちが本当に神様に感謝し、イエス・キリスト様がこの世に来られたその意義を感謝し、喜ぶそのような日々を過ごされるように望んでいます。そしてひとりでも多くの人がこの神様のみこころのように昇栄し、永遠の生命を得ることができるように、この素晴らしい福音が本当にひとりでも多くの人々に行きわたるように心から願っています。

このお話、証をすべて御子イエス・キリスト様のみ名を通していたします。アーメン。

聖 徒 の 道

1976年4月20日発行（毎月1回20日発行） 第20巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可